

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告139

- I 久宝寺遺跡（第76次調査）
- II 美園遺跡（第7次調査）

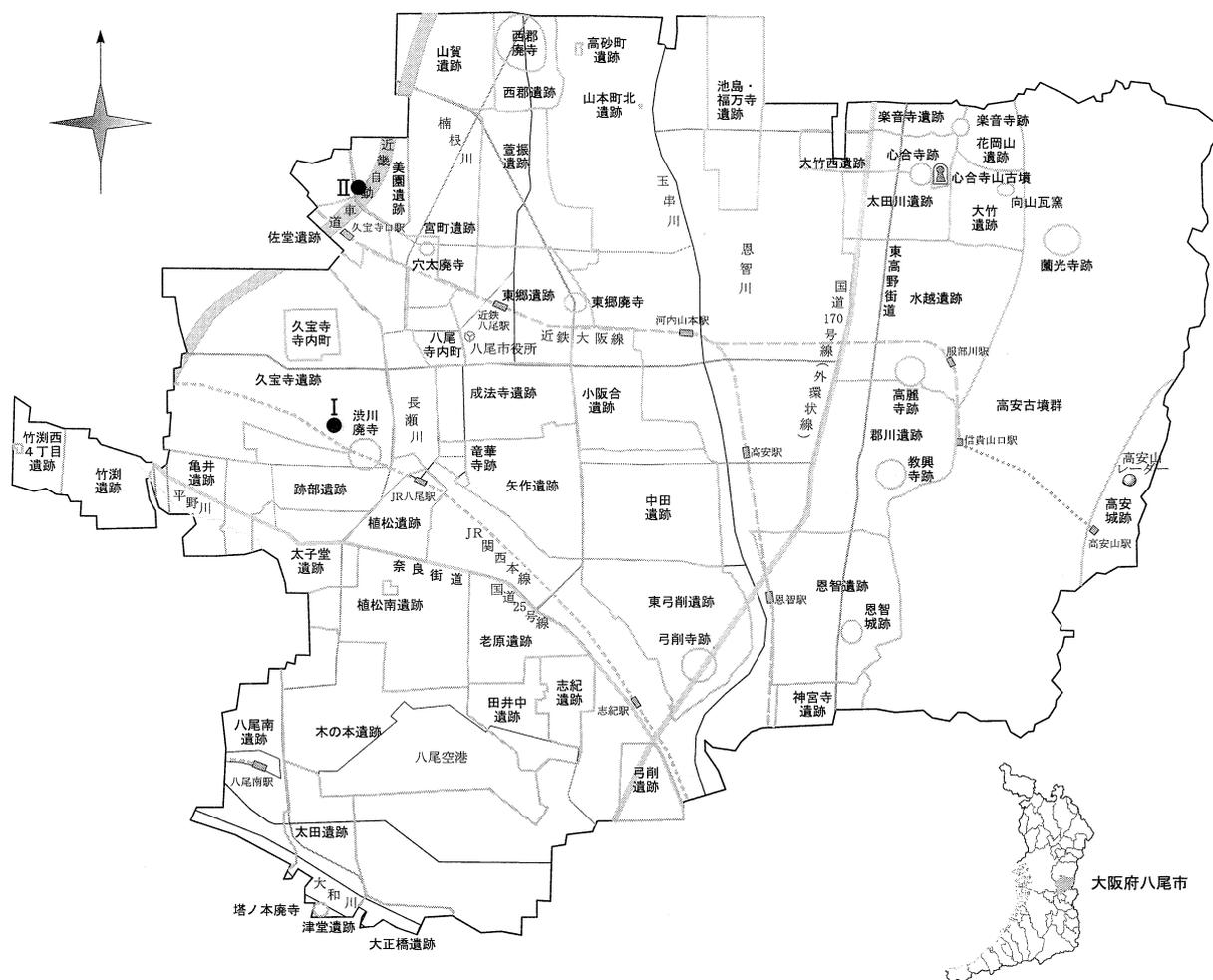
2012年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

財団法人八尾市文化財調査研究会報告139

I 久宝寺遺跡 (第76次調査)

II 美園遺跡 (第7次調査)



2012年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

は し が き

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

この度、平成21～22年度に実施いたしました大阪府水道事業に伴う久宝寺遺跡・美園遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。これらの遺跡は八尾市西部に位置し、調査地は旧大和川の主流であった長瀬川と古来より深く関連してきた地域であります。久宝寺遺跡では古墳時代中期～飛鳥時代、美園遺跡では中世の成果がありました。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 西 浦 昭 夫

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市で実施した大阪府水道事業に伴う二件の発掘調査報告書を収録したものである。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 調査は、大阪府水道部東部水道事業所からの委託により、財団法人八尾市文化財調査研究会が平成21～22年度に実施した。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2500分の1（平成8年7月編纂）、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成22年度版）を基に作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位（T.P.）である。
1. 本書で用いた方位は日本測地系（第Ⅵ系）の座標北を示している。
1. 土色については、『新版 標準土色帖』1998 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 遺物実測図の断面は、須恵器・陶磁器が黒、他を白とした。
1. 各調査に際しては、写真・実測図を作成している。市民の方々に広く利用されることを希望する。

目 次

はしがき

序

I 久宝寺遺跡第76次調査（KH2010-76）	1
II 美園遺跡第7次調査（MS2009-7）	11

I 久宝寺遺跡第76次調査(K H2010-76)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市南久宝寺3丁目～渋川町3丁目地内で実施した、配水管布設替工事(八尾中央線分岐・八尾市)4工区及び5工区に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第76次調査(KH2010-76)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会と大阪府水道部東部水道事業所、財団法人八尾市文化財調査研究会の三者による協定に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が大阪府水道部東部水道事業所から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成22年6月25日～11月24日(実働31日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約113㎡である。
1. 現地調査には梶本潤二・芝崎和美・田島宣子・永井律子・村田知子が参加した。
1. 整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成24年3月に完了した。
 - 遺物実測－飯塚直世・市森千恵子・永井・山内千恵子。
 - 遺物トレース－市森・山内。
 - その他－坪田。
1. 本書の執筆、編集は坪田が行った

本 文 目 次

第1章	はじめに	1
第2章	調査概要	2
第1節	調査の方法と経過	2
第2節	基本層序	2
第3節	検出遺構と出土遺物	7
第3章	まとめ	10

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	1
第2図	調査区位置図	3
第3図	基本層序	4
第4図	本調査区平断面図	6
第5図	本調査区出土遺物	7
第6図	試掘・立会調査区出土遺物	8

図版目次

図版 1	調査地西部（東から） 試掘 1（西から） 試掘 2 西壁 試掘 3 北壁	調査地東部（西から） 試掘 1 東壁 試掘 2 北壁 試掘 3 東壁
図版 2	試掘 4（南から） 試掘 5（南西から） 試掘 6（北から） 試掘 7（南から）	試掘 4 北壁 試掘 5 東壁 試掘 6 西壁 試掘 7 西～北壁
図版 3	試掘 8 掘削状況（北東から） 試掘 9（東から） 試掘 9 北壁 試掘 10（北から）	試掘 8 西壁 試掘 9（北から） 試掘 10 機械掘削（北から） 試掘 10 西壁
図版 4	試掘 11（南から） 試掘 12 北壁 試掘 13（南から） 試掘 14 6 層上面（北から）	試掘 11 西壁 試掘 13 掘削状況（南から） 試掘 13 北壁 試掘 14 6 層上面（南から）
図版 5	試掘 14 掘削状況（南東から） 試掘 15 機械掘削（南から） 試掘 15 南壁 試掘 16（南から）	試掘 14 西～北壁 試掘 15（北から） 試掘 16 機械掘削（北から） 試掘 16 西壁
図版 6	試掘 16 西壁土器出土状況（南東から） 試掘 17（南から） 試掘 17 東壁 試掘 18 東壁	試掘 17 掘削状況（北から） 試掘 17 東壁 試掘 18（南から） 試掘 19（北から）
図版 7	試掘 19（北東から） 試掘 20（南から） 試掘 21 機械掘削（北から） 試掘 21（南から）	試掘 19 西壁 試掘 20 西壁 試掘 21 調査状況（北西から） 試掘 21 西壁
図版 8	1 区（東から） 1 区（東から） 2 区（西から） 2 区北壁東半	1 区（西から） 1 区北壁 2 区調査状況（西から） 2 区北壁西半
図版 9	3 区（西から） 3 区北壁 4 区西半（西から）	3 区（東から） 3 区調査状況（東から） 4 区西半（東から）

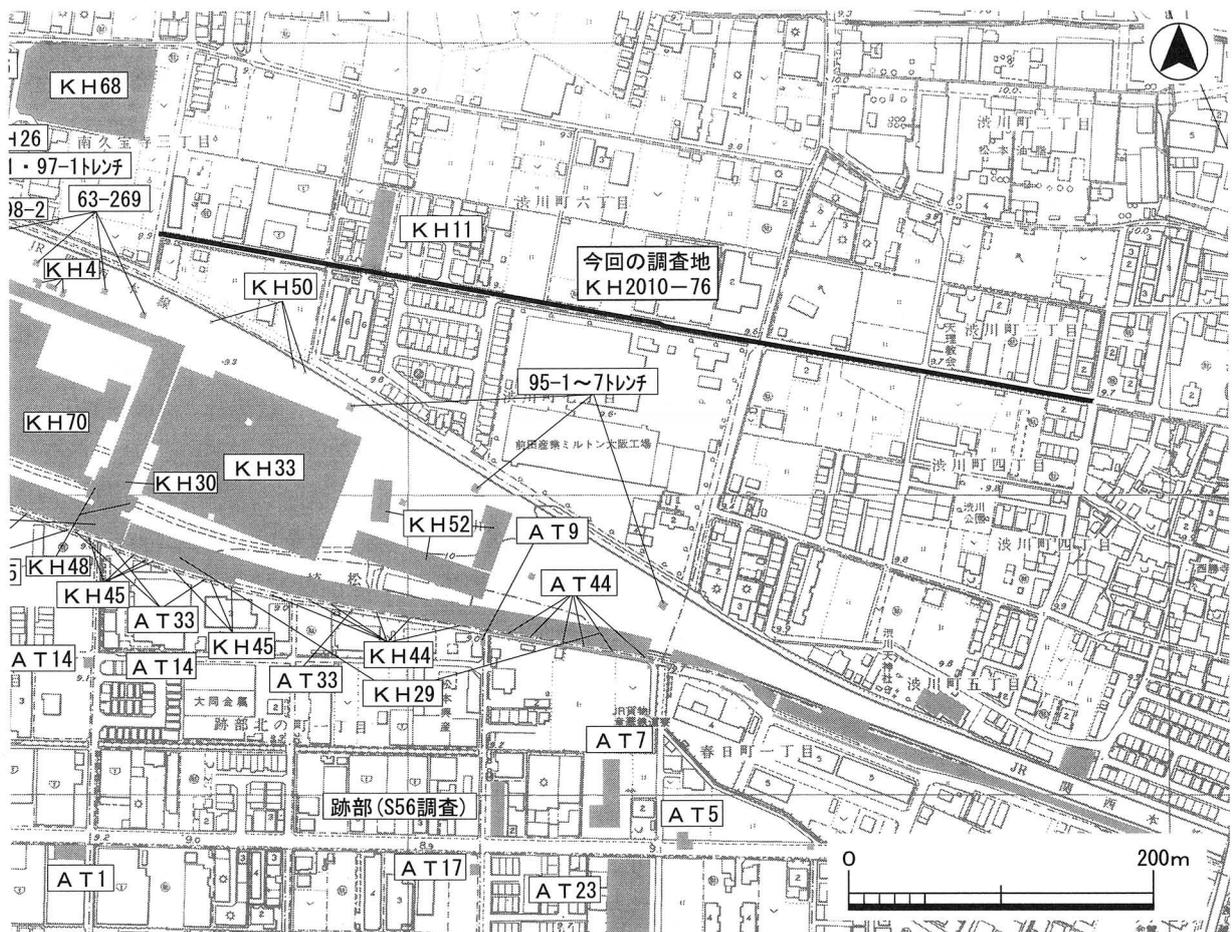
- | | | |
|------|-------------------|------------|
| | 4区東半（西から） | 4区北壁 |
| 図版10 | 5区（西から） | 5区東部（南から） |
| | 5区調査状況（東から） | 5区北壁 |
| | 6区機械掘削（東から） | 6区（東から） |
| | 6区調査状況（南東から） | 6区北壁 |
| 図版11 | 立会1（西から） | 立会1南壁 |
| | 立会2（南西から） | 立会2南壁 |
| | 立会3北壁 | 立会4北壁 |
| | 立会5（西から） | 立会6南壁 |
| 図版12 | 立会7（西から） | 立会7南壁 |
| | 立会8南壁 | 立会9（西から） |
| | 立会9東壁 | 立会10（西から） |
| | 立会11南壁 | 立会12（南西から） |
| 図版13 | 立会12北壁 | 立会13北壁 |
| | 立会14北壁 | 立会15（南西から） |
| | 立会15南壁 | 立会16南壁 |
| | 立会17（北西から） | 立会18南壁 |
| 図版13 | 立会12北壁 | 立会13北壁 |
| | 立会14北壁 | 立会15（南西から） |
| | 立会15南壁 | 立会16南壁 |
| | 立会17（北西から） | 立会18南壁 |
| 図版14 | 出土遺物 S O 1、3区、試掘3 | |
| 図版15 | 出土遺物 試掘3、立会4、立会6 | |

第1章 はじめに

久宝寺遺跡は八尾市の西端に位置し、現在の行政区画によると、八尾市内では北久宝寺1～3、久宝寺1～6、西久宝寺、南久宝寺1～3、神武町、北亀井町1～3、龍華町1・2、渋川町1～7がその範囲となっており、さらに西の大阪市域・北の東大阪市域に広がっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸にあたり、同地形上で南側に跡部遺跡・亀井遺跡・太子堂遺跡が存在する。

当遺跡発見の契機は、昭和10年に八尾市久宝寺5丁目で行われた道路工事の際に、弥生土器・土師器・丸木船の残片が出土したことによる。昭和48年度には、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道天理～吹田線関連の総延長13.5kmに及ぶ発掘調査が開始され、以降、大阪府教育委員会・大阪府文化財センター・東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会において多次にわたる発掘調査が実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代晩期～近世にわたる遺跡であることが確認されている。

今回の調査地は遺跡範囲の南東部、旧国鉄竜華操車場東部北側の東西道路上に位置する。周辺では、当調査研究会による第11・68次調査等があり、古墳時代中期～後期を中心とする多大な調査成果を得ている。



第1図 調査地位置図

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、配水管布設替工事（八尾中央線分岐・八尾市）4工区及び5工区に伴う調査で、当調査研究会が久宝寺遺跡内で行った第76次調査（KH2010-76）である。

調査対象は、東西道路上に計画された延長約800mに及ぶ開削工事区間である。配水管布設替工事であり、新設管が既設管と重複する部分については調査対象外とすることとなった。そのためまず埋設管等確認の為に試掘部分のうち20～30m間隔となる20箇所（21地点）について試掘調査を実施し、地層や遺構、遺物包含層の確認を実施した（西から試掘1～21）。その結果、発掘調査が必要であると判断された試掘13～15間の約50mの区間については、工事に先立って本調査を実施した（西から1～6区）。また当初発掘調査対象としていた西部の区間については、試掘調査の結果から設計が見直され、新設管が既設管とほぼ重複することとなった。そのため遺物包含層の存在が確認された試掘1～14間の約308m区間については、既設管撤去・新設管設置の工事と並行して随時立会調査を実施し、地層確認・遺物採集等を実施した（西から立会1～18）。なお5工区東部で予定した試掘については中止となった。以上のような経緯から、発掘調査面積は当初予定の約537㎡から、約113㎡に大きく減少することとなった。

調査は、人力・機械掘削併用により工事掘削深度まで実施し、適宜下層確認調査を実施した。

調査で使用した標高の基準は、調査地道路上に点在する三・四級基準点相当の八尾市街区多角点・補助点を使用した。試掘調査区の位置については工事設計図を使用し、方位もこれに準じた。

地区名	工事名
試掘1	試掘箇所31
試掘2	試掘箇所30
試掘3	試掘箇所29
試掘4	試掘箇所28
試掘5	試掘箇所26
試掘6	試掘箇所20西
試掘7	試掘箇所20東
試掘8	試掘箇所19
試掘9	試掘箇所16
試掘10	試掘箇所15
試掘11	試掘箇所39
試掘12	試掘箇所14
試掘13	試掘箇所10
試掘14	試掘箇所38
試掘15	試掘箇所9
試掘16	試掘箇所1
試掘17	試掘箇所⑨
試掘18	試掘箇所④
試掘19	試掘箇所⑩
試掘20	試掘箇所③
試掘21	試掘箇所①

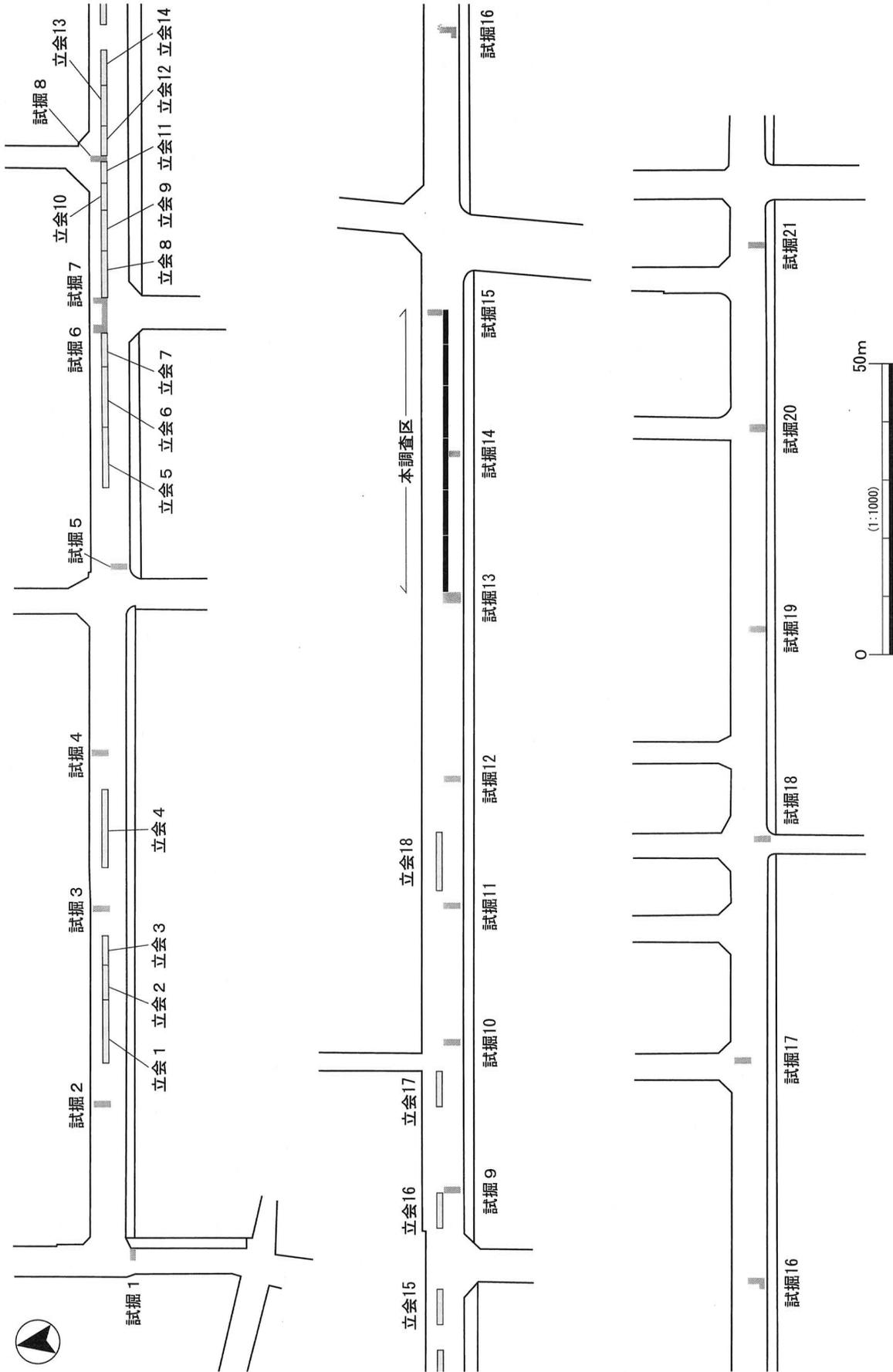
第2節 基本層序

試掘調査区の地層に、本調査・立会調査で得られた情報を加え、調査地全域の基本層序とする。既設管路等による攪乱が多く、また本調査・立会調査は鋼矢板を打設しながらの調査で、部分的な地層観察となった場合が多い。なお試掘18・21は攪乱が著しく断面観察が不可能であった。調査地の現地表面の標高は、西半の試掘1～14ではT.P.+9.0m前後で、ここから東の長瀬川自然堤防に向かって高くなって行き、東端の試掘21ではT.P.+9.5mを測る。

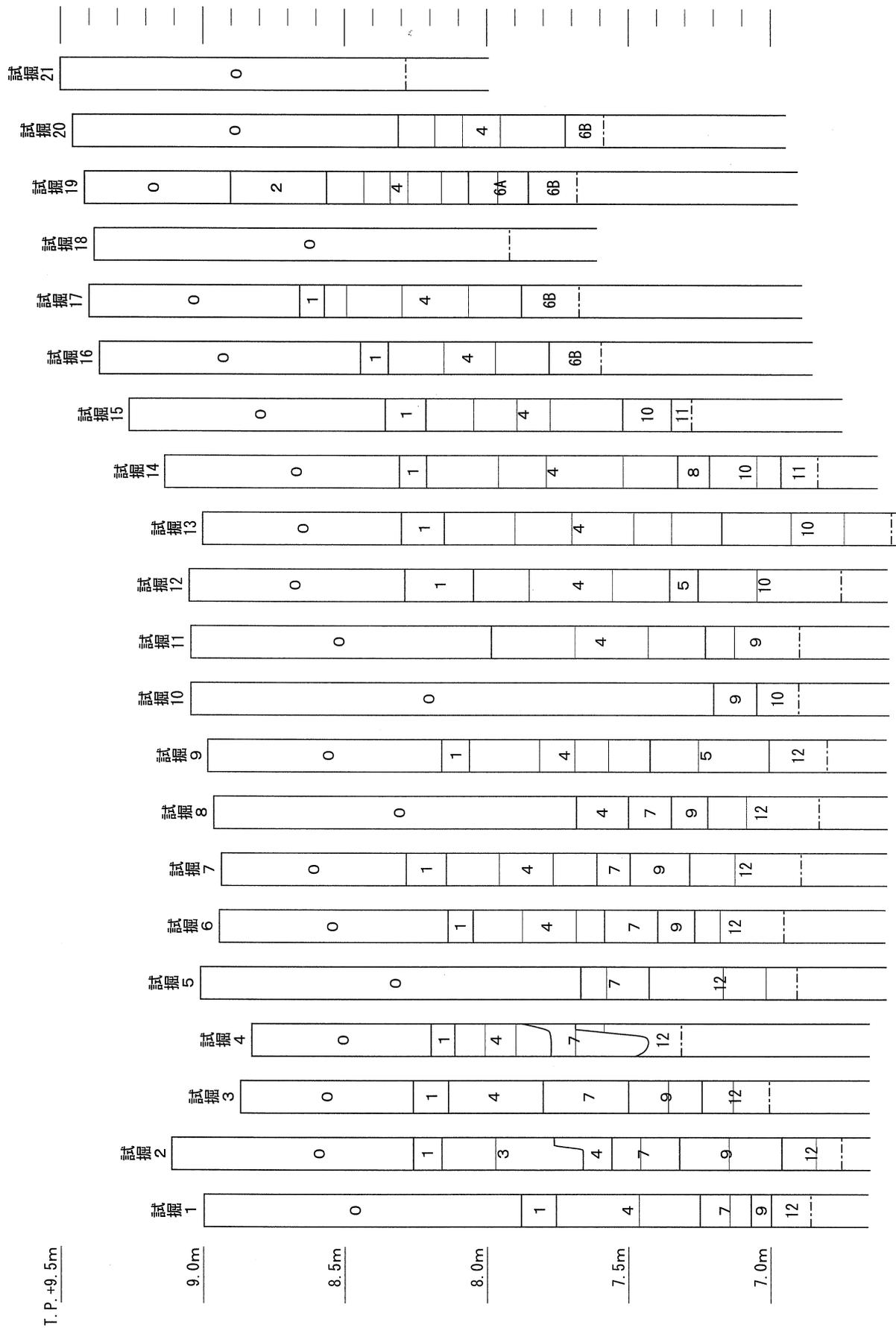
0層：アスファルト・盛土・攪乱。

1層：10G5/1緑灰色系細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト グライ化。旧耕土。

試掘1～17で見られた。西半ではT.P.+8.2～8.3m、東の試掘17ではT.P.+8.7mで、現地表面と平行する状況であるが、西端の試掘1ではT.P.+7.9mと一段低くなっている。



第2図 調査区位置図



第3図 基本層序

2層：10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂～中粒砂。

試掘19で見られた洪水砂である。近世の長瀬川の氾濫によると考えられる。

3層：2.5Y6/3にぶい黄色系極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土。

試掘2のT.P.+8.2～7.7mでのみ見られた。近世の島畑盛土と考えられ、2層に分かれる。

4層：2.5Y6/1黄灰色系シルト～細粒砂混粘土質シルト。

全域に見られる作土層で、層厚40～90cm、最大5層に分層が可能である。西部・東部ではT.P.+7.6～7.8m、試掘11～14ではT.P.+7.2mまで及んでいる。概ねFe斑を多く含み攪拌が著しい層相で、一部ブロック状で淘汰不良の部分もある。上層部はグライ化している。時期は中世～近世に比定される。

5層：5Y6/1灰色細粒砂～極粗粒砂。

試掘9・12、本調査区1・2区の4層下位で見られた砂層で、同一の河川堆積及び洪水砂であろう。試掘10では不明であるが、試掘11では攪拌され3層となっていると考えられる。西への広がり立会15・16でも見られた。

6A層：5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～細礫混シルト質粘土。

6B層：7.5Y5/1灰色細粒砂～細礫。

6層は試掘16以西で見られた水成層で、6B層は河川堆積あるいは洪水砂、その上位の6A層は試掘19でのみ確認した湿地性堆積である。時期等は不明である。

7層：10YR5/3にぶい黄褐色系極細粒砂混シルト Mn斑 Fe斑。

試掘8以西でみられた土壌化の著しい層で、飛鳥時代～中世の遺物包含層である。試掘3・4付近がT.P.+7.8mで最も高く、層厚は10～30cmを測る。炭を含み遺構埋土と思われる部分も見られた。

8層：2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～粗粒砂多混シルト質粘土 Fe斑。

試掘14で見られた古墳時代後期～飛鳥時代の遺物包含層である。本調査区においては2～6区で見られたが、試掘15には及んでいない。本調査区では落ち込みS O 1埋土となる。

9層：10YR6/1褐灰色系極細粒砂～細粒砂混シルト Mn斑 Fe斑。

試掘11以西でみられた土壌化の著しい層で、古墳時代中期～後期の遺物包含層である。試掘3～8がT.P.+7.4m前後で、東・西に下がってゆく。層厚は10～30cmを測る。

10層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。

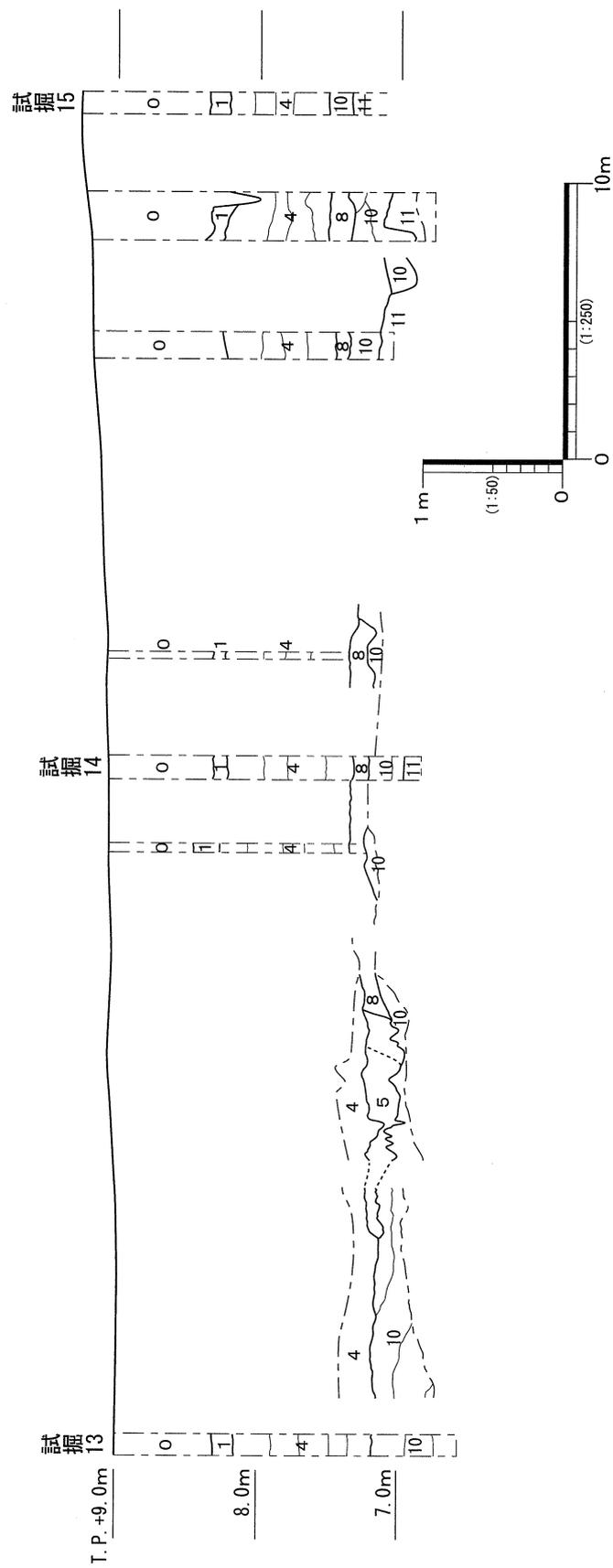
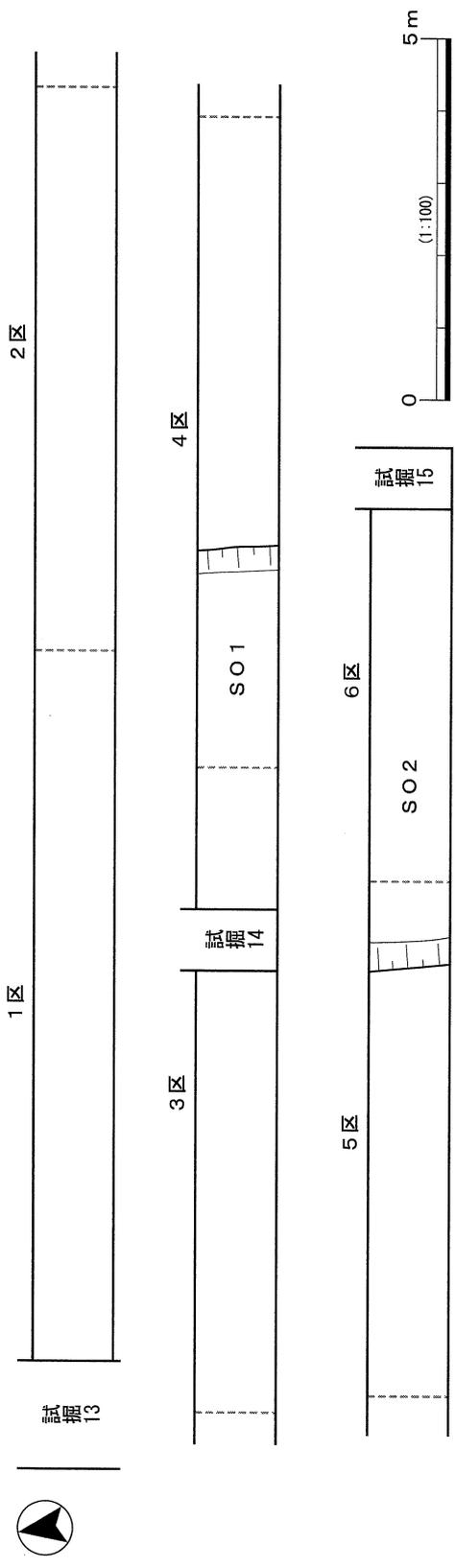
試掘10以東で見られた粘土層で、最大3層に分層できる。湿地性の堆積と考えられるが、シルトや砂粒を含む部分もあり、攪拌され作土化している可能性もある。本調査区5・6区ではS O 2埋土となる。

11層：2.5GY6/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂。

試掘14・15で見られた砂層で、流水層である。

12層：2.5Y6/2灰黄色シルト。

試掘9以西で見られたシルト層で、試掘4がT.P.+7.7mを測り最も高く、東・西に下がってゆく。上部は攪拌され土壌化しており、古墳時代中期～後期の遺構面となる。静水性の水成層で、試掘8・9では粘土～シルトの互層状を呈する他、立会4・5では極細粒砂～細粒砂の部分が見られた。



第4図 本調査区平断面図

第3節 検出遺構と出土遺物

本調査では基本層序10・11層上面で落ち込み2基(SO1・2)を検出した。また試掘・立会調査区においては、試掘4、立会4・9の壁面で土坑・ピット状の落ち込みを、試掘5、立会11では遺構埋土と思われる地層を確認した。遺物については、試掘1・17~19、立会13・15以外の調査区からの出土があった。

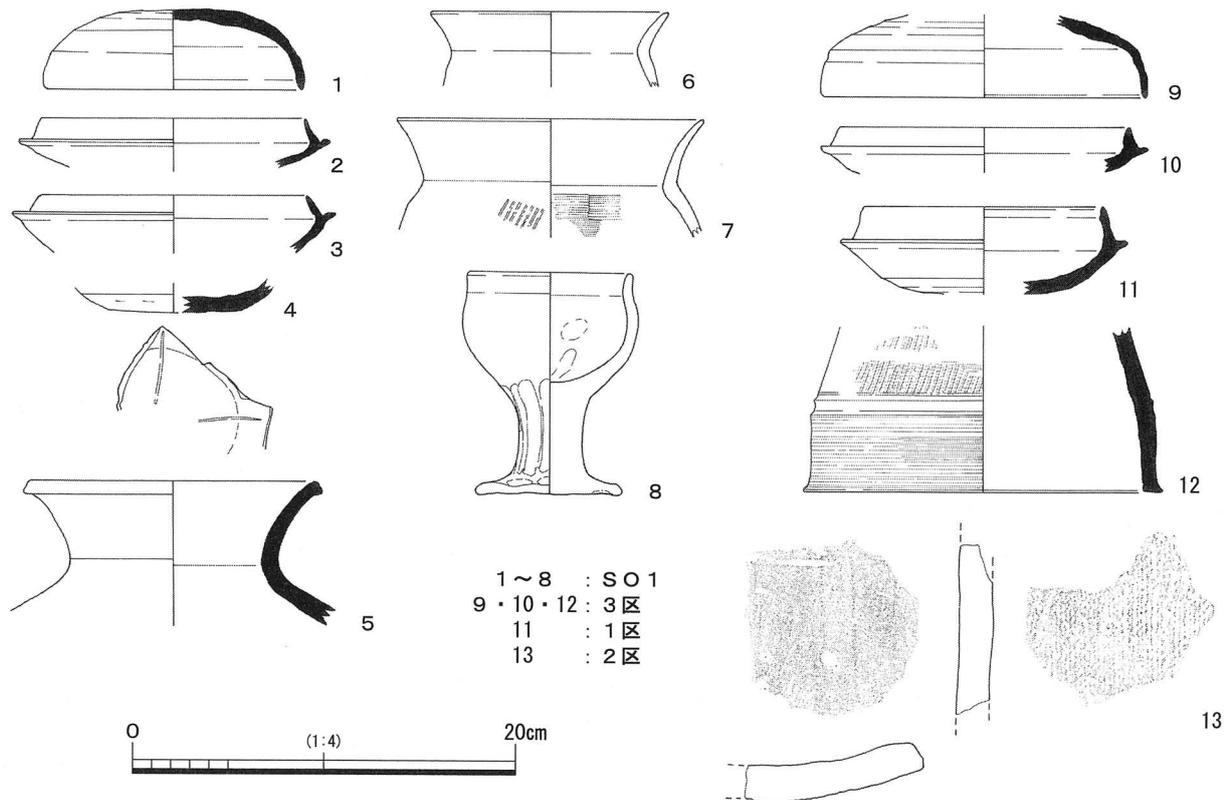
1) 本調査区

SO1

本調査2~4区に及び、4区西部で検出した南北方向の肩から西に落ち込む。深さは10~20cmを測る。埋土は基本層序8層にあたる。水田耕作土の可能性はある。遺物は古墳時代後期~飛鳥時代の土師器・須恵器を多く含んでおり、1~8を図化した。1~5は須恵器である。1は杯蓋、2・3は杯身で、TK209型式(飛鳥時代初頭)に比定される。4は杯身底部と思われる。外面にヘラ記号(「十」?)を有する。5は甕で、焼成不良で瓦質に近い。6~8は土師器である。6・7は小形の甕で、7の体部調整は内面がハケ、外面は平行タタキと思われる。8は脚付鉢で、復元口径8.6cm・器高11.7cmを測る。脚底部は手捏ね成形による円盤状で、指頭圧痕が明瞭である。脚部外面は面取り風にナデを施す。特異な器種で類例は少ないと思われ、時期等は不明である。

SO2

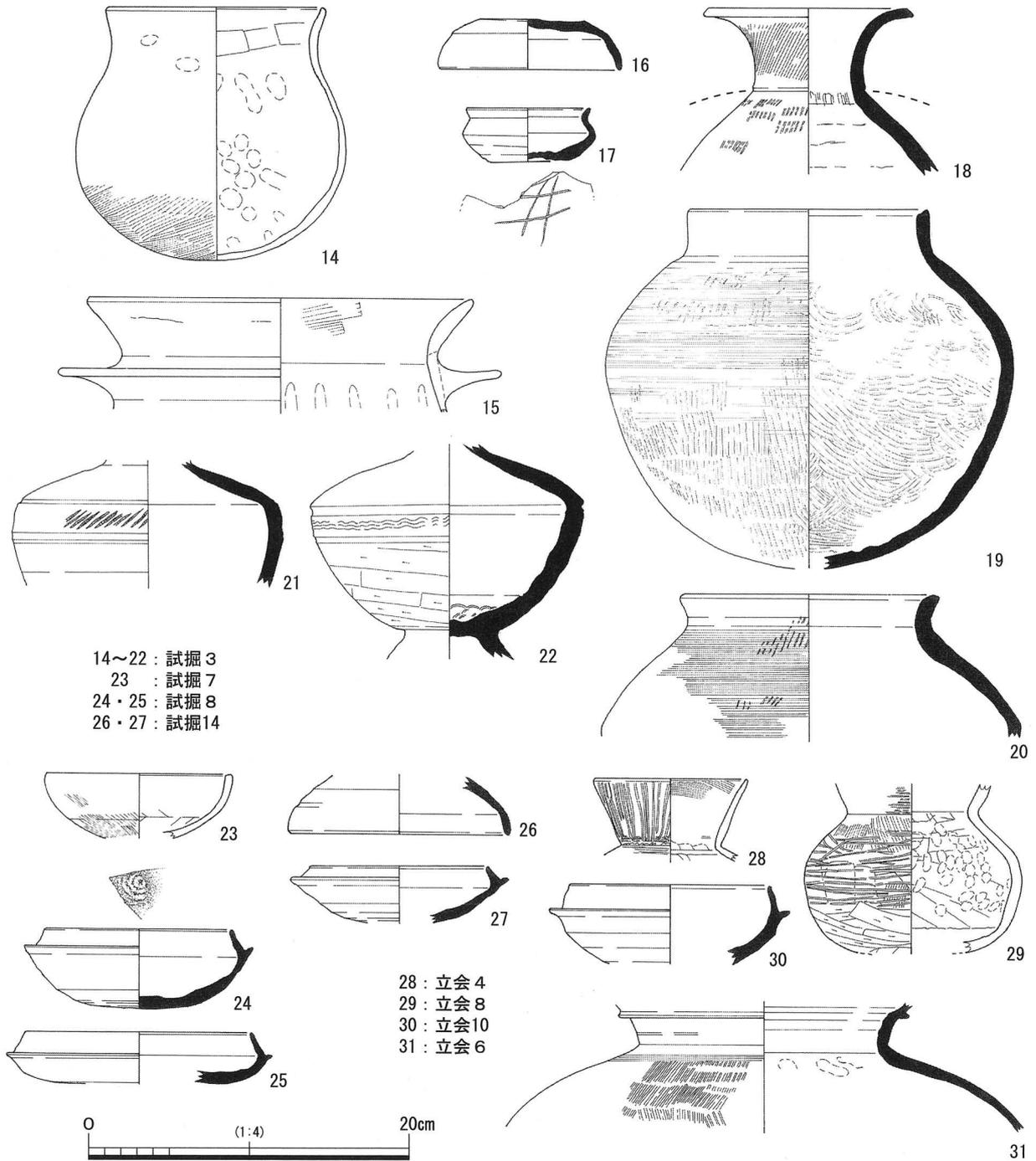
本調査5・6区でみられ、5区東部で検出した南北方向の肩から東に落ち込む。基本層序11層をベースとして10層が落ち込むもので、南北方向の自然河川の最終的な堆積を示すものかもしれない。



第5図 本調査区出土遺物

包含層出土遺物

4層、あるいはSO1埋土である8層出土の9~13を図化した。9~12は須恵器である。9は杯蓋、10・11は杯身で、9の天井部、11の底部外面は灰を被る。10は焼成不良である。9はTK43型式（6世紀末）、10はTK209型式（飛鳥時代初頭）、11はMT15型式（6世紀前半）に比定されよう。12は器台脚部で、外面にヘラ描直線文・回転カキ目を施す。13は平瓦で、凹面布目、凸面縄目タタキである。



第6図 試掘・立会調査区出土遺物

2) 試掘調査区

試掘4北壁で、T.P.+7.7mの12層上面から切り込む遺構を確認した。深さ20cm程度を測り、埋土は10YR5/3にぶい黄褐色シルト～極細粒砂多混粘土質シルトである。遺物は出土していない。また試掘5ではT.P.+7.5m前後の7層中で、炭を多く含む遺構埋土と思われる地層が見られた。

遺物は14～27を図化した。14は土師器甕で、1/2程度が遺存しており、復元口径13.6cm・器高16.0cmを測る。調整は口縁部内面と底体部外面の下半にハケを施す。15は土師器羽釜である。16～22は須恵器である。16は杯蓋で、口縁部の1/2を欠く。口縁部外面に灰が被る。17は広口短頸壺で、底部外面に「井」字状のヘラ記号を施す。18は提瓶と考えられる。調整は口縁部外面にハケ、体部外面に平行タタキが残る。口縁部に歪みがある。19・20は短頸の直口壺である。調整は外面が平行タタキ後上部に回転カキ目、内面は19に同心円タタキが見られる。21・22は台付長頸壺である。肩部下位には、21が刺突文、22が波状文を巡らせる。14～22は試掘3の7層出土で、時期的には概ね飛鳥時代前半頃に比定される。23は土師器高杯で、杯底部外面に放射状にハケを施す。試掘7の9層出土で、時期は古墳時代中期～後期に比定される。24・25は須恵器杯身で、24は内底面に同心円タタキを施す。共にTK10型式（古墳時代後期中葉）に比定される。試掘8の9層出土。26・27は須恵器杯蓋・杯身で、TK43～TK208型式（古墳時代後期末～飛鳥時代初頭）に比定される。試掘14の8層出土で、SO1に帰属すると考えられる。

3) 立会調査区

立会4の壁面でピット、立会9の壁面で土坑状の落ち込みを、共に12層上面で確認した。また立会11では7層中で遺構埋土と思われる炭を多く含む地層を確認した。

遺物は28～31を図化した。28・29は精製の土師器直口壺である。28は口縁部外面に放射状にヘラミガキを加える。29は体部ハケ後ヘラミガキ、底部ヘラケズリである。28が立会4、29が立会8出土。30は須恵器杯身で、底部外面に灰が被る。TK47型式（古墳時代中期後半）頃に比定される。立会10出土。31は須恵器甕で、体部外面調整は平行タタキである。古墳時代中期前半の初期須恵器に属すると思われる。立会6出土。

第3章 まとめ

今回の調査は、点的・線的なものであったが、久宝寺遺跡南東部を横断する形で実施したもので、その意義は大きいといえよう。調査では古墳時代～近世に及ぶ地層や遺物を確認した。出土遺物はコンテナ3箱である。

中央の本調査区付近では、これまでの周辺の調査で知られていなかった飛鳥時代の遺物包含層（8層）を確認した。8層は作土である可能性が高く、一帯には古墳時代後期～飛鳥時代の生産域が広がるものと考えられる。

西部では、既往の調査で確認されている古代～中世（7層）、古墳時代中期～後期（9層）の遺物包含層が良好に遺存しており、平面的には捉えられなかったが遺構と考えられる地層も見られた。7層は立会13以西、9層は試掘11以西で確認している。立会15～試掘9、試掘12、本調査2区では5層水成層が見られたが、北部の調査地でも確認している中世頃に埋没すると考えられる河川堆積であろう。部分的に9層を削平している状況が見られた。

東部の調査区では中世～近世の作土が見られ、生産域となっている。それ以下は試掘16以東で古長瀬川に由来すると考えられる河川堆積・湿地性堆積（6層）が見られた。

参考文献

- ・西村公助1992「Ⅱ 久宝寺遺跡第11次調査（KH91-11）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 財団法人八尾市文化財調査研究会報告34』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・菊井佳弥2007「8.久宝寺遺跡第68次調査（KH2006-68）」『平成18年度 財団法人八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・沼 斎1991「20.久宝寺遺跡（90-397）の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅰ 八尾市文化財調査報告22』八尾市教育委員会
- ・坪田真一2011「Ⅱ-3-7）久宝寺遺跡（2009-488）の調査」『八尾市内遺跡平成22年度発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告65 平成22年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

圖 版



調査地西部(東から)



調査地東部(西から)



試掘1(西から)



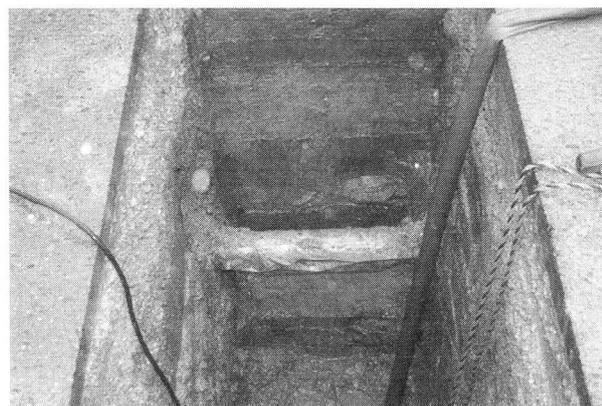
試掘1東壁



試掘2西壁



試掘2北壁



試掘3北壁



試掘3東壁



試掘 4 (南から)



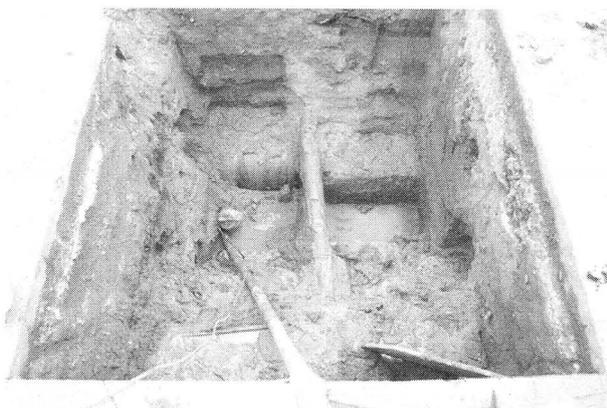
試掘 4 北壁



試掘 5 (南西から)



試掘 5 東壁



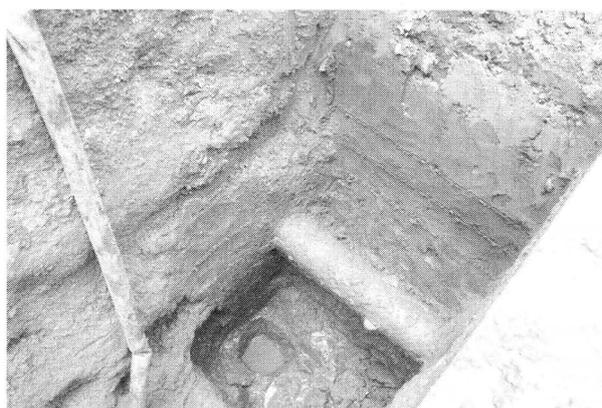
試掘 6 (北から)



試掘 6 西壁



試掘 7 (南から)



試掘 7 西～北壁



試掘 8 掘削状況(北東から)



試掘 8 西壁



試掘 9 (東から)



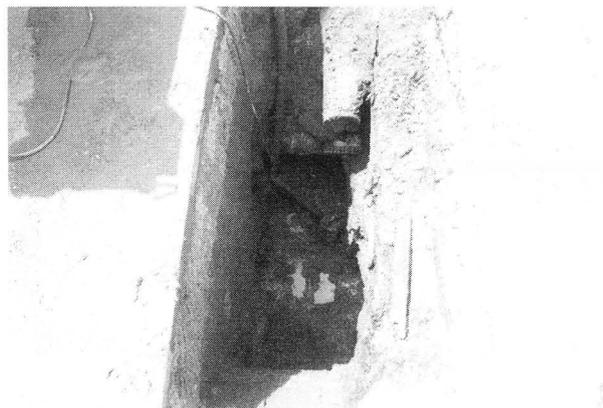
試掘 9 (北から)



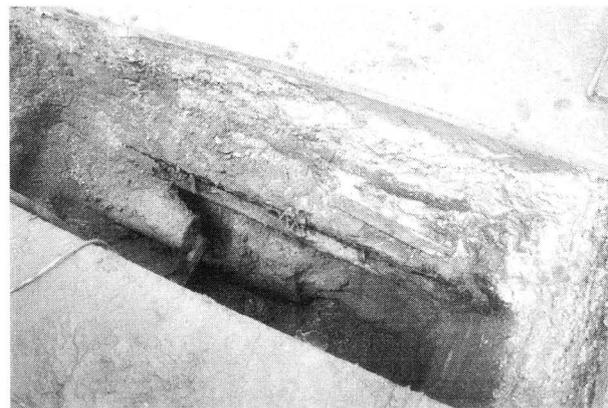
試掘 9 北壁



試掘10機械掘削(北から)



試掘10(北から)



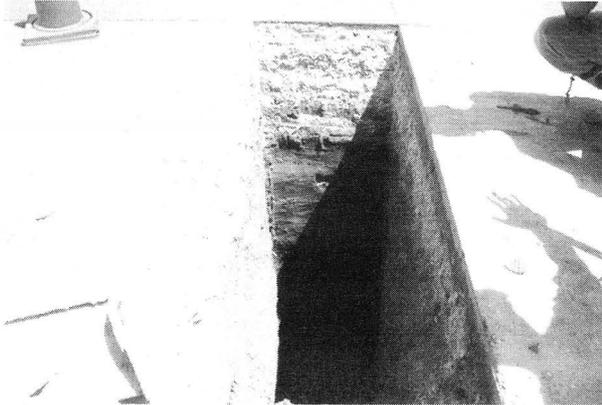
試掘10西壁



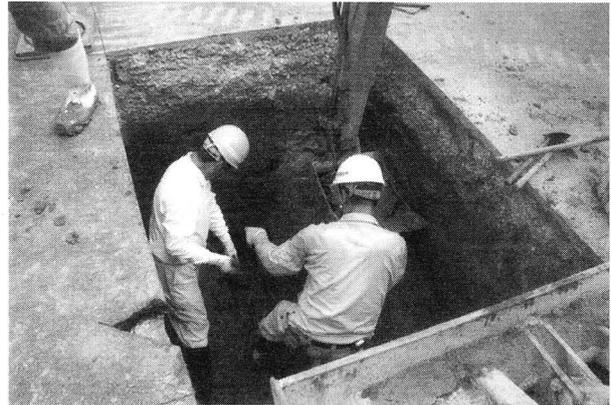
試掘11(南から)



試掘11西壁



試掘12北壁



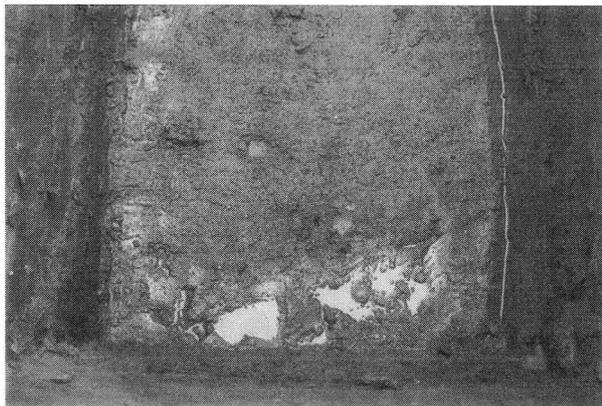
試掘13掘削状況(南から)



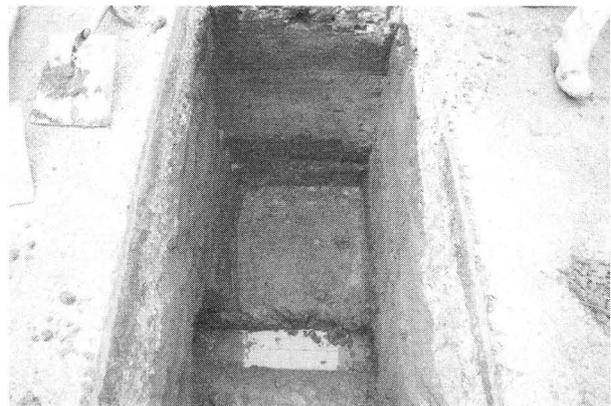
試掘13(南から)



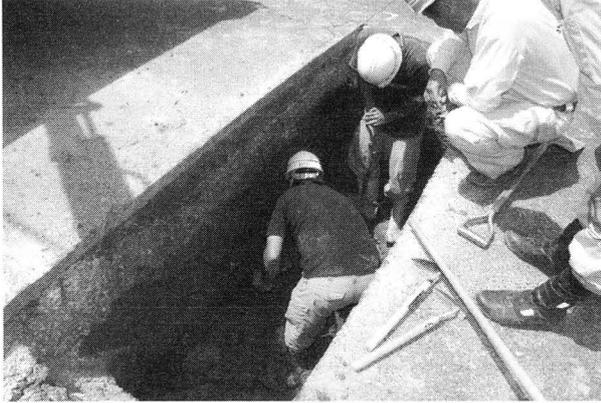
試掘13北壁



試掘14 6層上面(北から)



試掘14 6層上面(南から)



試掘14掘削状況(南東から)



試掘14西～北壁



試掘15機械掘削(南から)



試掘15(北から)



試掘15南壁



試掘16機械掘削(北から)



試掘16(南から)



試掘16西壁



試掘16西壁土器出土状況(南東から)



試掘17掘削状況(北から)



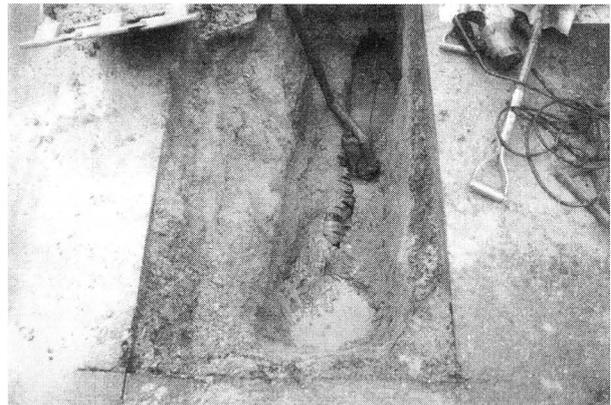
試掘17(南から)



試掘17東壁



試掘17東壁



試掘18(南から)



試掘18東壁



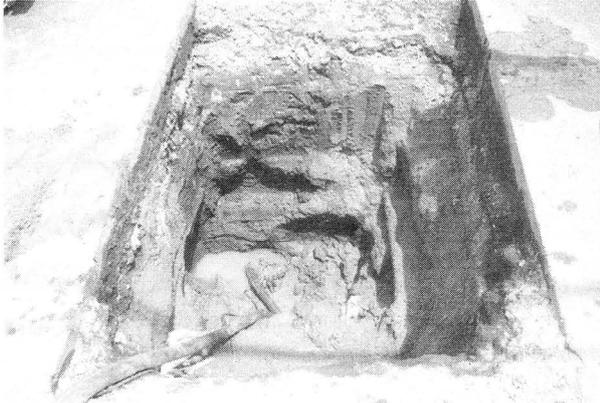
試掘19(北から)



試掘19(北東から)



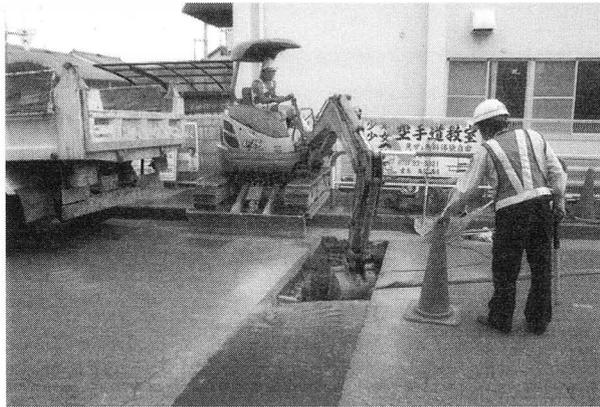
試掘19西壁



試掘20(南から)



試掘20西壁



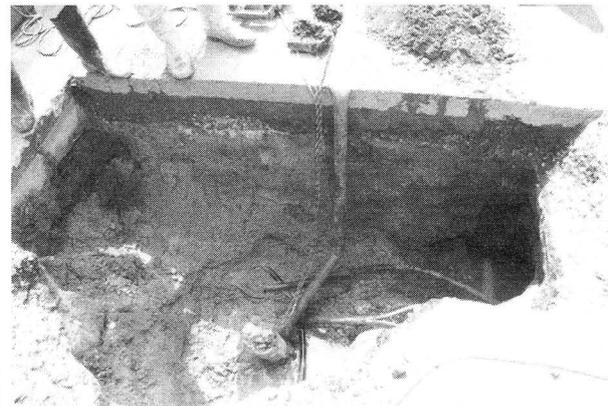
試掘21機械掘削(北から)



試掘21調査状況(北西から)



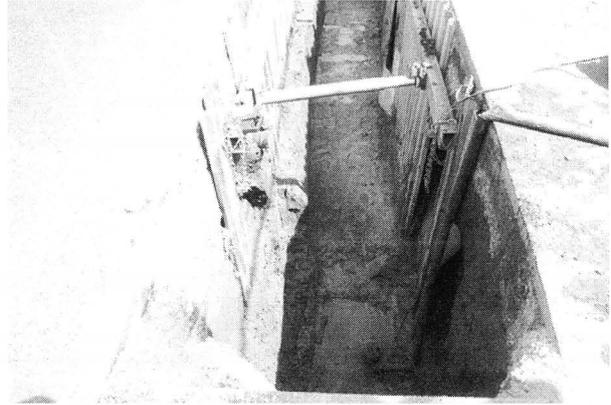
試掘21(南から)



試掘21西壁



1区(東から)



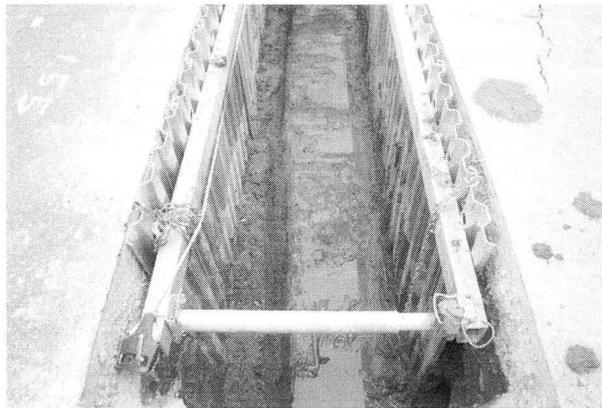
1区(西から)



1区(東から)



1区北壁



2区(西から)



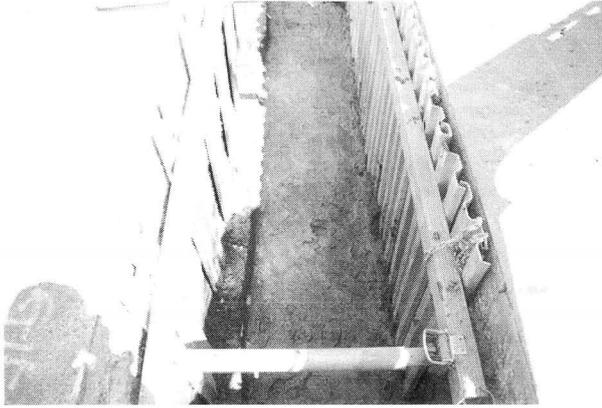
2区調査状況(西から)



2区北壁東半



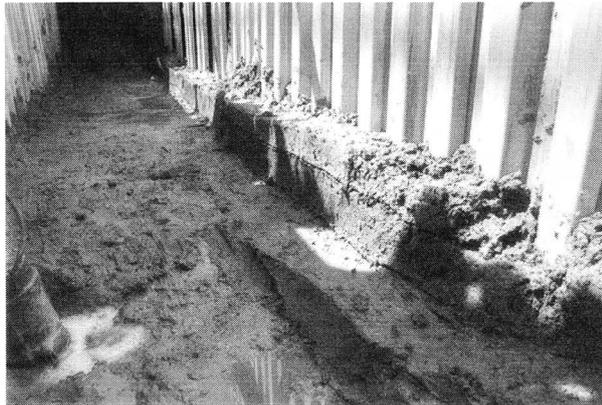
2区北壁西半



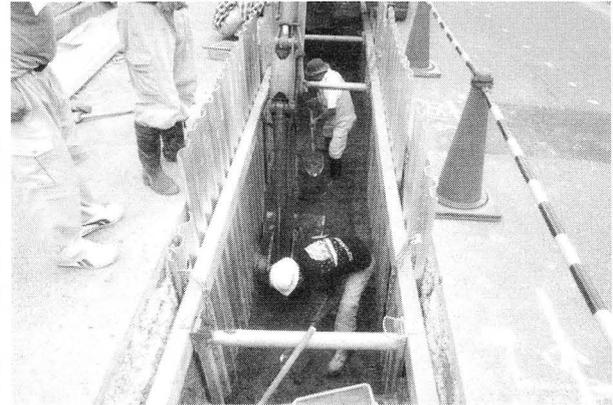
3区(西から)



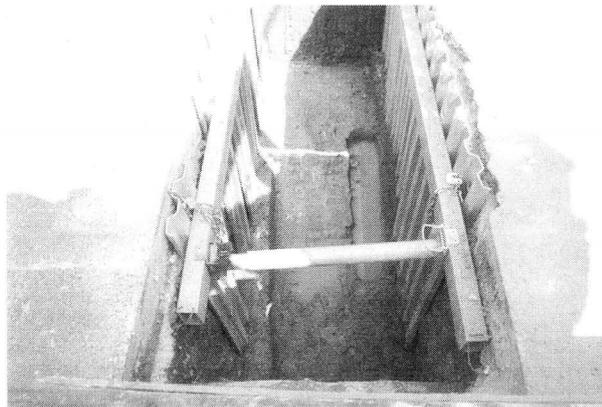
3区(東から)



3区北壁



3区調査状況(東から)



4区西半(西から)



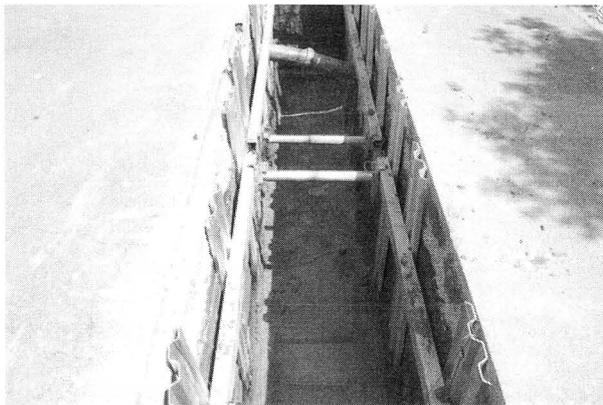
4区西半(東から)



4区東半(西から)



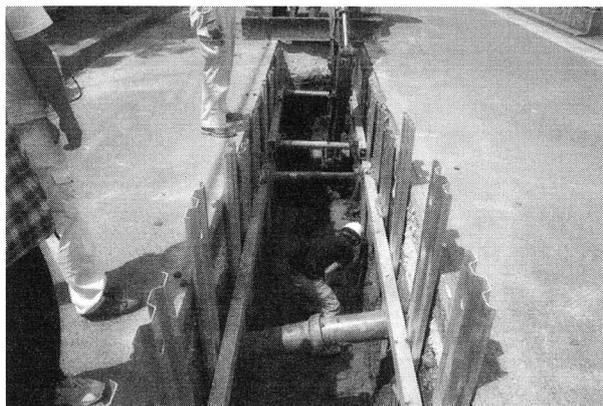
4区北壁



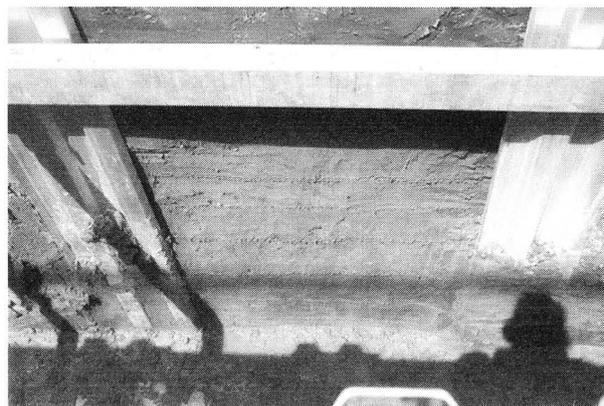
5区(西から)



5区東部(南から)



5区調査状況(東から)



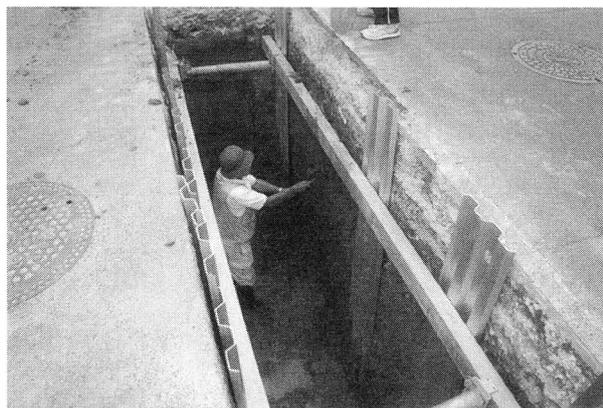
5区北壁



6区機械掘削(東から)



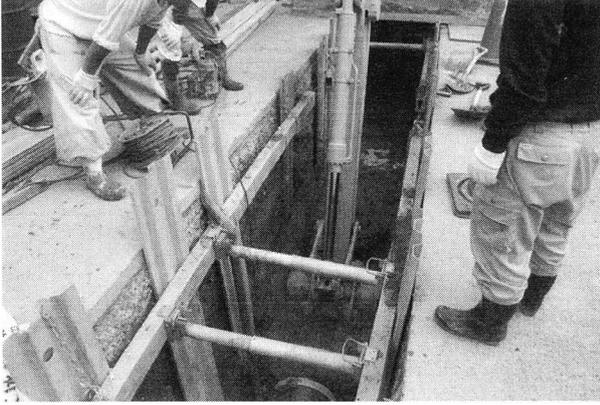
6区(東から)



6区調査状況(南東から)



6区北壁



立会1(西から)



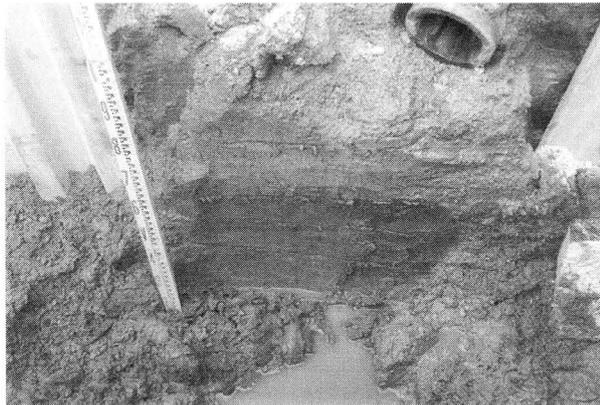
立会1南壁



立会2(南西から)



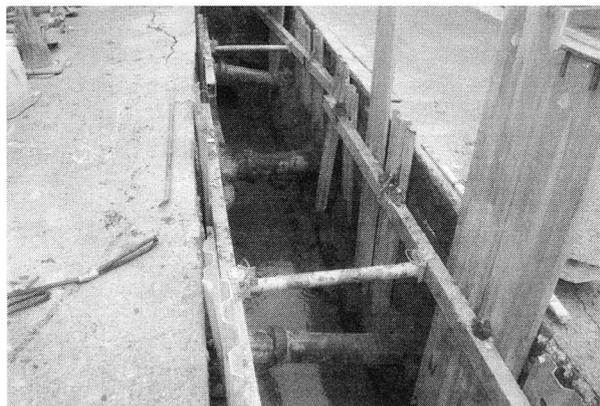
立会2南壁



立会3北壁



立会4北壁



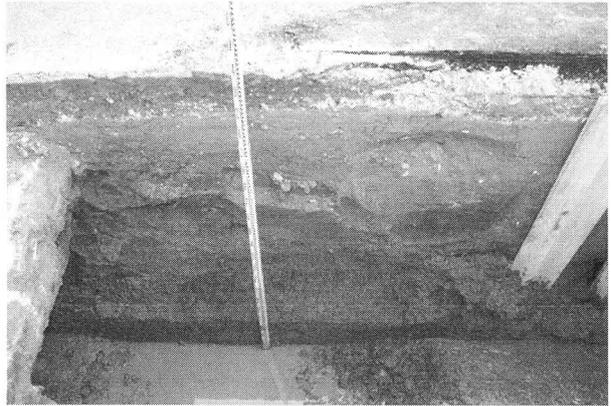
立会5(西から)



立会6南壁



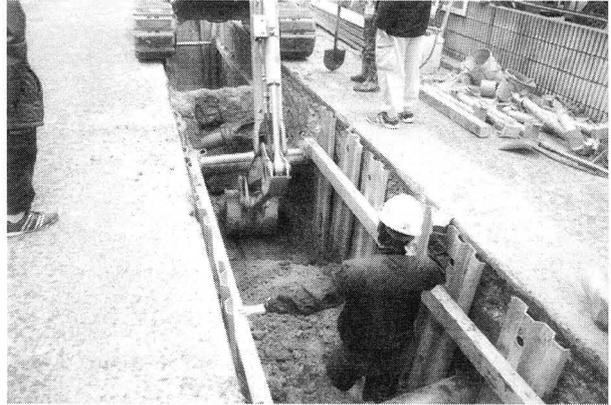
立会7 (西から)



立会7南壁



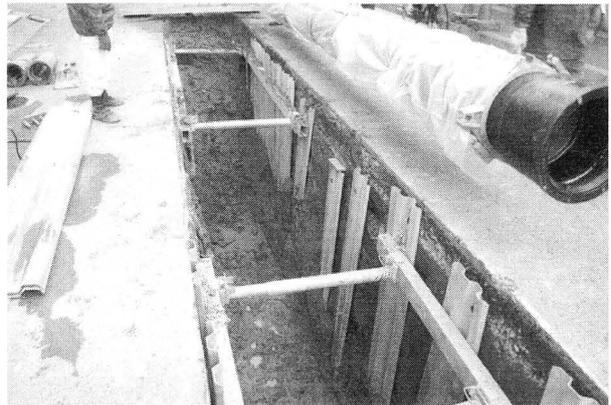
立会8南壁



立会9 (西から)



立会9東壁



立会10(西から)



立会11南壁



立会12(南西から)



立会12北壁



立会13北壁



立会14北壁



立会15(南西から)



立会15南壁



立会16南壁

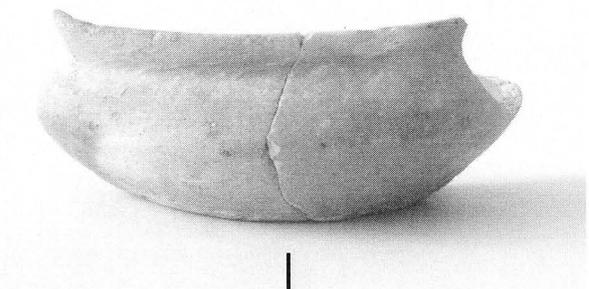
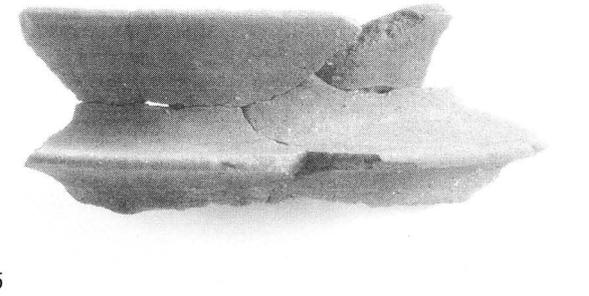
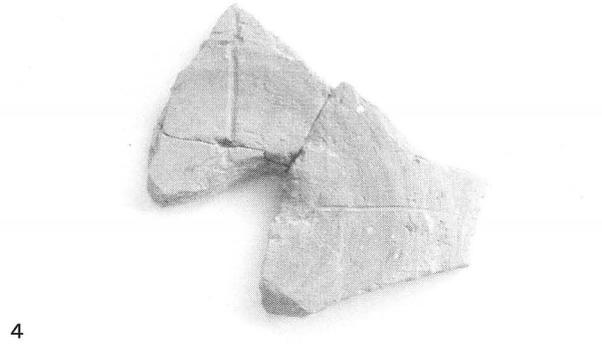
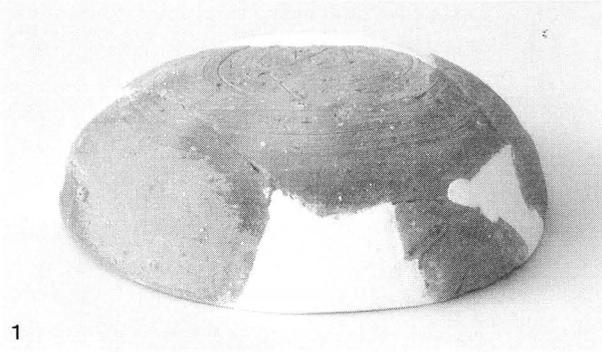


立会17(北西から)



立会18南壁

図版14
出土遺物



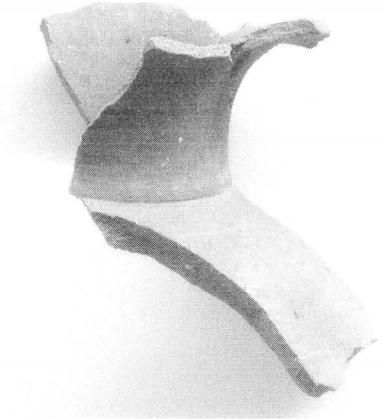
SO1、3区、試掘3



16



21



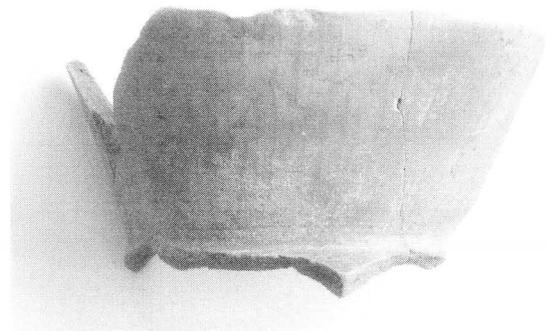
18



22



19



28



20



31

II 美園遺跡第7次調査(M S 2009-7)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市美園町で実施した、大阪府工業用水道改良事業 連絡管布設工事Φ600(1次工水 八尾市)に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する美園遺跡第7次調査(MS2009-7)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会と大阪府水道部東部水道事業所、財団法人八尾市文化財調査研究会の三者による協定に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が大阪府水道部東部水道事業所から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成21年11月19日～平成22年7月5日(実働24日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約141㎡である。
1. 現地調査には伊藤静江・梶本潤二・北原清子・竹田貴子・田島宣子・徳谷尚子・西出一樹・村井俊子・村田知子・山内千恵子が参加した。
1. 整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成24年3月に完了した。
遺物実測－飯塚直世・市森千恵子・永井律子・山内。
遺物トレース－山内。
その他－坪田。
1. 本書の執筆、編集は坪田が行った。

本文目次

第1章	はじめに	11
第2章	調査概要	12
第1節	調査の方法と経過	12
第2節	基本層序	13
第3節	検出遺構と出土遺物	14
第3章	まとめ	26

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	11
第2図	調査区位置図	13
第3図	基本層序	14
第4図	第1面平面図	15
第5図	第2面平面図	16
第6図	S E 201平断面図	17
第7図	S E 202平断面図	17
第8図	S E 201出土遺物	18
第9図	S E 202出土遺物	18
第10図	S K 205平断面図	19
第11図	土坑出土遺物	20
第12図	ピット出土遺物	21
第13図	S D 201・205・206・207出土遺物	23
第14図	S D 208出土遺物	24
第15図	包含層出土遺物	25

表 目 次

表1	美園遺跡発掘調査一覧表	12
表2	第2面ピット一覧表	22
表3	第2面溝法量表	22

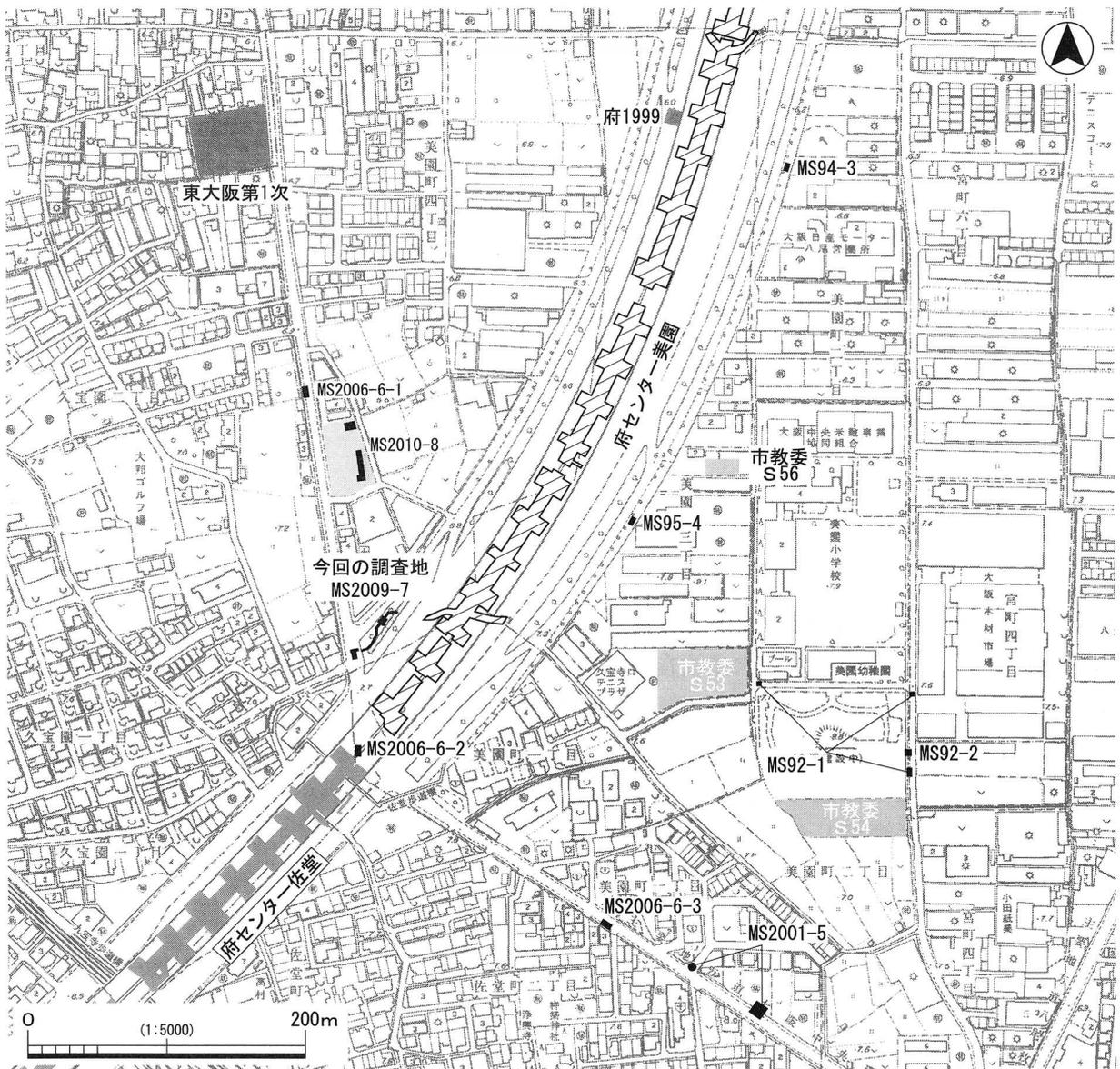
図版目次

- 図版1 調査地全景（北から）
試掘②西半第2面（西から）
試掘②東半西壁
試掘④北壁
- 図版2 1区第2面（西から）
2区第2面（北から）
3区第1面南半（南から）
3区調査状況（南から）
- 図版3 3区第2面（北から）
- 図版4 3区第2面S K 203（東から）
3区第2面S K 206上層南壁土師器皿集積
4区第2面（北から）
4区第2面S E 202曲物検出（東から）
- 図版5 4区第2面S E 202（東から）
5区第1面（東から）
5区第2面S K 210（東から）
- 図版6 5区第2面（北から）
- 図版7 6区第2面S K 211西壁
6区北壁
8区調査状況（西から）
9区調査状況（南から）
- 図版8 出土遺物 S E 201、S K 203
- 図版9 出土遺物 S K 205、S K 206、S K 207
- 図版10 出土遺物 S E 202、S K 205、S K 206、S P 224、S D 201、S D 206
- 図版11 出土遺物 S D 205、S D 206、S D 207
- 図版12 出土遺物 S D 208
- 図版13 出土遺物 S D 208、包含層
- 試掘①北壁
試掘②東半第1面（南から）
試掘③（南から）
府道部掘削立会（南から）
1区西壁
2区南壁
3区第1面北半（東から）
3区第2面S E 201北壁
3区第2面S E 201（上が西）
3区第2面S K 205（東から）
3区第2面S K 207南壁
4区第2面S E 202上部西壁
4区第2面S E 202曲物（東から）
5区第2面S D 205（南から）
5区第2面S D 207土器出土状況（東から）
6区第2面（北から）
6区第2面S P 224（南から）
7区調査状況（北から）
8区第2面S D 208遺物出土状況（西から）
9区第2面（南から）

第1章 はじめに

美園遺跡は八尾市北西部に位置し、現在の行政区画では美園町1～4丁目がその範囲とされており、遺跡範囲は南北約600m・東西約500mに及んでいる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、北側には友井東遺跡、南側には佐堂遺跡・宮町遺跡が隣接している。

当遺跡は、昭和50(1975)年に大阪府教育委員会が府道大阪中央環状線敷地内で実施した河内ラインガス導管布設に伴う発掘調査で発見された遺跡である。昭和53(1978)・54(1979)年度には八尾市教育委員会による最初の発掘調査が美園町2丁目において実施され(当時は佐堂遺跡として調査)、古墳時代初頭～前期の壺棺や遺物包含層、古代～中世の遺物包含層等が確認された。そして昭和55(1980)～58(1983)年度には、近畿自動車道建設に伴う発掘調査が(財)大阪文化財センターにより実施され、縄文時代後期～近世の遺構・遺物が検出されている。なかでも古



第1図 調査地位置図

表1 美園遺跡発掘調査一覧表

調査名	文献	主な時代・遺構・遺物
府センター 美園	渡辺昌宏・他1985『美園 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』財団法人大阪文化財センター	縄文時代～近世。 美園古墳。家形埴輪。
府1999	泉本知秀1999『美園遺跡 大阪府埋蔵文化財調査報告1998-4』大阪府教育委員会	弥生時代前期～中期。 竪穴住居等。
東大阪 第1次	池崎智詞2001『共同住宅建設工事に伴う 美園遺跡第1次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会	奈良時代末～鎌倉時代。 土壙・溝等。墨書土器。
市教委 S53	米田敏幸1981「6. 佐堂遺跡」『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報 八尾市文化財調査報告7』八尾市教育委員会 ※当時は佐堂遺跡として調査	弥生時代終末期～古墳時代前期。遺物包含層。
市教委 S54	米田敏幸1981「5. 佐堂遺跡」『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報 八尾市文化財調査報告7』八尾市教育委員会 ※当時は佐堂遺跡として調査	古墳時代。 壺棺。
市教委 S56	米田敏幸1983「第5章 美園遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要報告1980・1981年度 (財)八尾市文化財調査研究会報告2』財団法人八尾市文化財調査研究会	古墳時代初頭～前期。 建物・井戸・溝。
MS1992-1	成海佳子1993「X 美園遺跡第1次調査 (MS92-1)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 八尾市文化財調査研究会報告39』財団法人八尾市文化財調査研究会	弥生時代終末期～古墳時代前期。土坑・溝・柱穴等。
MS1992-2	岡田清一1993「XI 美園遺跡第2次調査 (MS92-2)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 八尾市文化財調査研究会報告39』財団法人八尾市文化財調査研究会	古墳時代後期。 溝。
MS1994-3	高萩千秋1996「VI 美園遺跡第3次調査 (MS94-3)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告50』財団法人八尾市文化財調査研究会	平安時代末の水田。
MS1995-4	西村公助1996「XIV 美園遺跡第4次調査 (MS95-4)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告53』財団法人八尾市文化財調査研究会	弥生時代～古墳時代前期の落ち込み。
MS2001-5	高萩千秋2003「XVII 美園遺跡第5次調査 (MS2001-5)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』財団法人八尾市文化財調査研究会	古墳時代以前の河川堆積。
MS2006-6	坪田真一・他2008「第2節 美園遺跡第6次調査 (MS2006-6)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告115』財団法人八尾市文化財調査研究会	河川堆積。
MS2009-7	今回報告	
MS2010-8	高萩千秋2011「(22) 美園遺跡第8次調査 (MS2010-8)」『財団法人八尾市文化財調査研究会事業報告 平成22年度』財団法人八尾市文化財調査研究会	中世。 井戸・土坑等。

墳時代前期の方墳である美園古墳の検出は特筆され、検出状態のまま地中に保存されることとなり、周濠内出土の家形埴輪・壺形埴輪は重要文化財指定を受けている。

第2章 調査概要

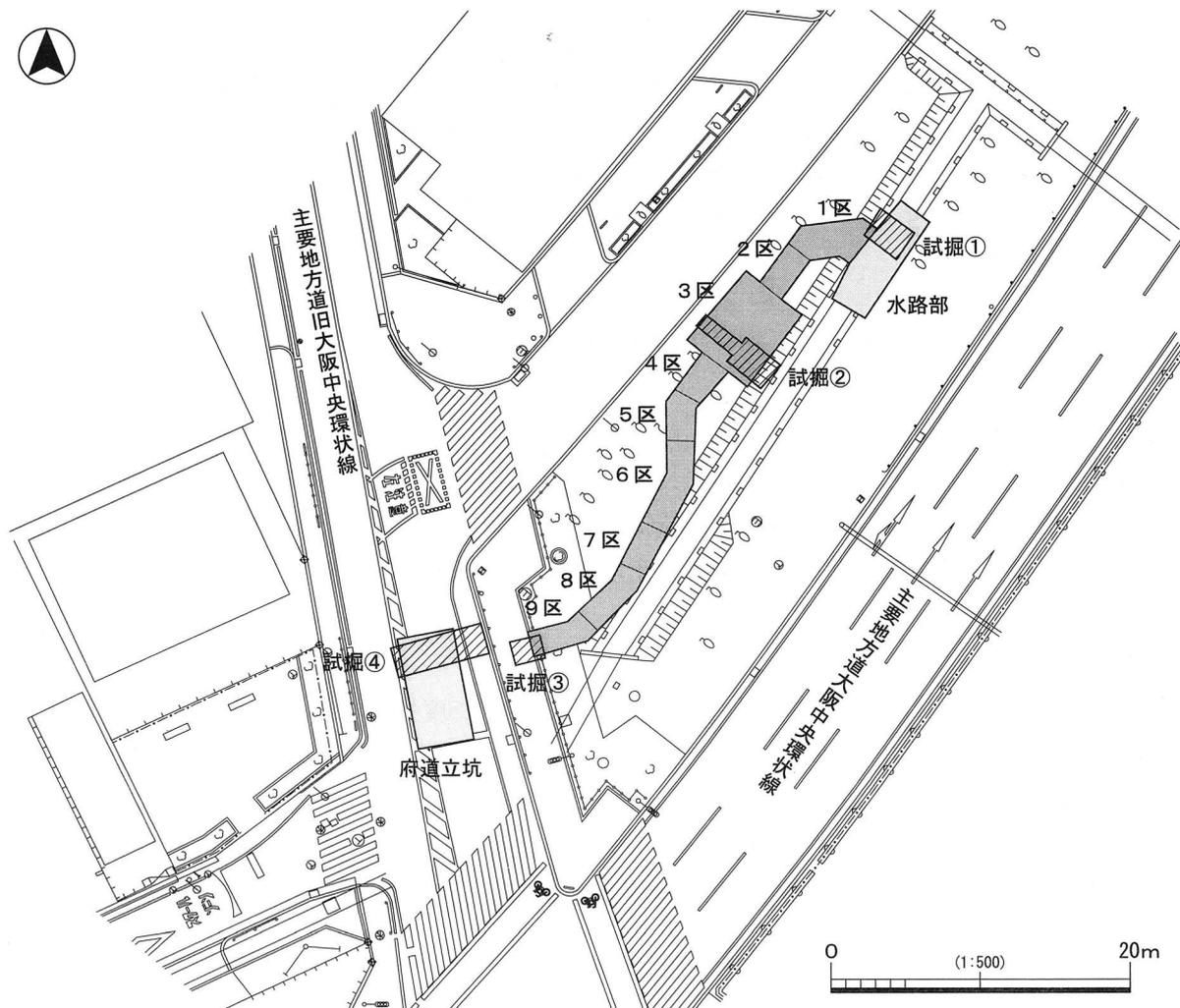
第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、大阪府工業用水道改良事業 連絡管布設工事Φ600（1次工水 八尾市）に伴う調査で、当調査研究会が美園遺跡内で行った第7次調査（MS2009-7）である。調査地は、府道大阪中央環状線とその側道間の緑地帯部分、及び交差する府道部分で、総面積は約141㎡を測る。

調査はまず埋設管等確認の為に試掘調査部分について実施し、その後工事工程に合わせて連絡管布設部分の調査を実施した。なお試掘調査の結果、北端の既設水路下の管路部分、及び南端の府道立坑部分については、対象となる地層が遺存していないと判断されたため、調査対象から除外し、府道立坑部分は重機掘削の立会を行った。

調査順序としては、試掘①・②の後、1～3区を北から、4～8区については南から、続いて試掘③・④、9区、府道部掘削立会となっている。

調査は、現地表下約1.4mまでを機械掘削とし、以下約0.3mについて人力掘削により実施した。



第2図 調査地位置図

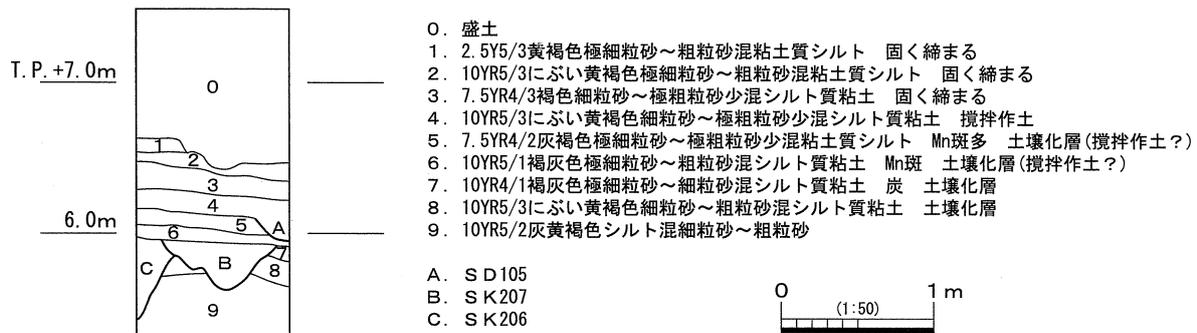
また適宜下層確認調査を実施した。なお6区南半～8区北部、及び9区南半は攪乱されている。

遺構名は遺構略号+面+二桁番号とし、北から順に付した。

調査で使用した標高の基準は、調査地西部道路上に位置する四級基準点相当の八尾市街区補助点〈3B263：T.P.+7.516〉を使用した。方位は工事設計図に準じた。

第2節 基本層序

3・4区間断面を基本層序とし、第0～9層を設定した。0層は盛土。1～3層は固く締まる層相で、近世～近代の整地層と考えられる。8・9区付近では1～3層は見られず、T.P.+6.2～6.3mで旧耕土、T.P.+6.0～6.2で近世頃の作土が見られた。4層は攪拌された作土で、下面が第1面である。5・6層も攪拌が認められ、作土の可能性がある土壌化層である。7・8層も土壌化の著しい層相で、上面が第2面である。9層の細粒砂～粗粒砂は河川堆積で、下層調査によると1区でT.P.+4.3m、3区でT.P.+4.8m、7区でT.P.+4.3m以下に及ぶことを確認している。東側府センター調査地の成果によると、当河川は飛鳥時代の長瀬川にあたり、規模は幅70m・深さ2.5～3.5mを測り、ほぼ南東-北西方向に流れていたことが確認されている。



第3図 基本層序

第3節 検出遺構と出土遺物

〈第1面〉

1・3～6区で調査を実施し、4層下面 (T.P. +6.1～6.2m) で溝7条 (S D101～107)、土坑1基 (S K101) を検出した。溝は耕作溝、土坑も耕作痕であろう。時期は中世～近世に比定されよう。

S D101～107

北西－南東方向の平行する溝群で、方向は北から西に約25度振っている。S D102とS D103が近接する以外は、1.7～2.5m間隔で構築されている。S D105は南部で方向が南に振っている。規模は幅30～60cm、深さ約15cm程度、埋土は4層と同じである。遺物はS D102・103・104から13世紀頃までの土師器、須恵器、瓦器片が少量出土したが、下層からの巻上げであろう。東の府センター調査地においても同様の平行する溝群、およびこれらに直交する方向の溝群が検出されており、同一の生産域と考えられる。

S K101

3区S D103～104間で一部を検出したもので、方向性や埋土については溝群と同じである。遺物は土師器皿、瓦器碗、中国製白磁片が出土したが、溝群と同じく下層からの巻上げであろう。

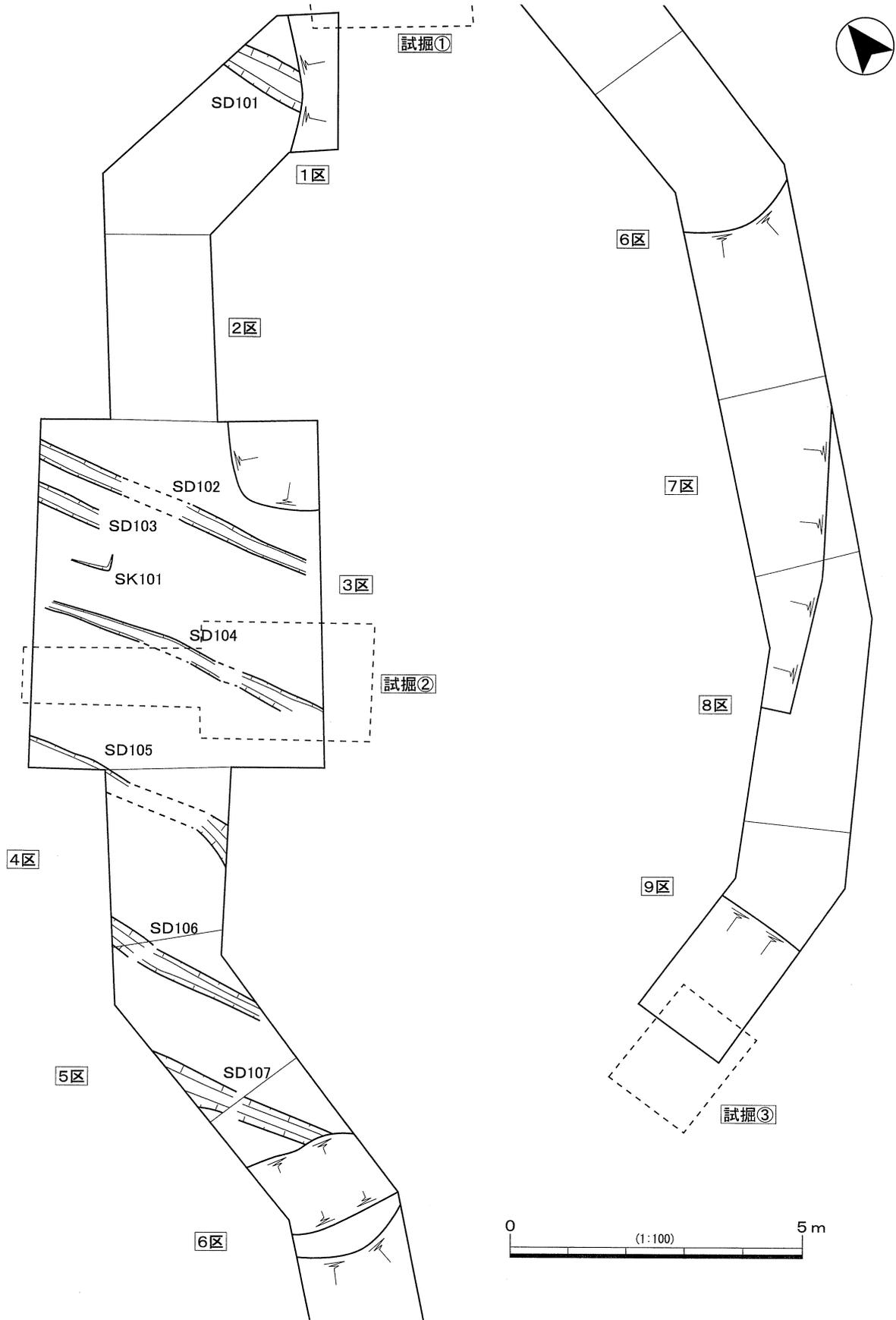
〈第2面〉

8層上面 (T.P. +5.9～6.0m) で、井戸2基 (S E201・202)、土坑11基 (S K201～211)、ピット25個 (S P201～225)、溝8条 (S D201～208) を検出した。遺構構築面は7・8層のいずれかであろうが明確には峻別できておらず、また9層上面で検出した遺構も含んでいる。

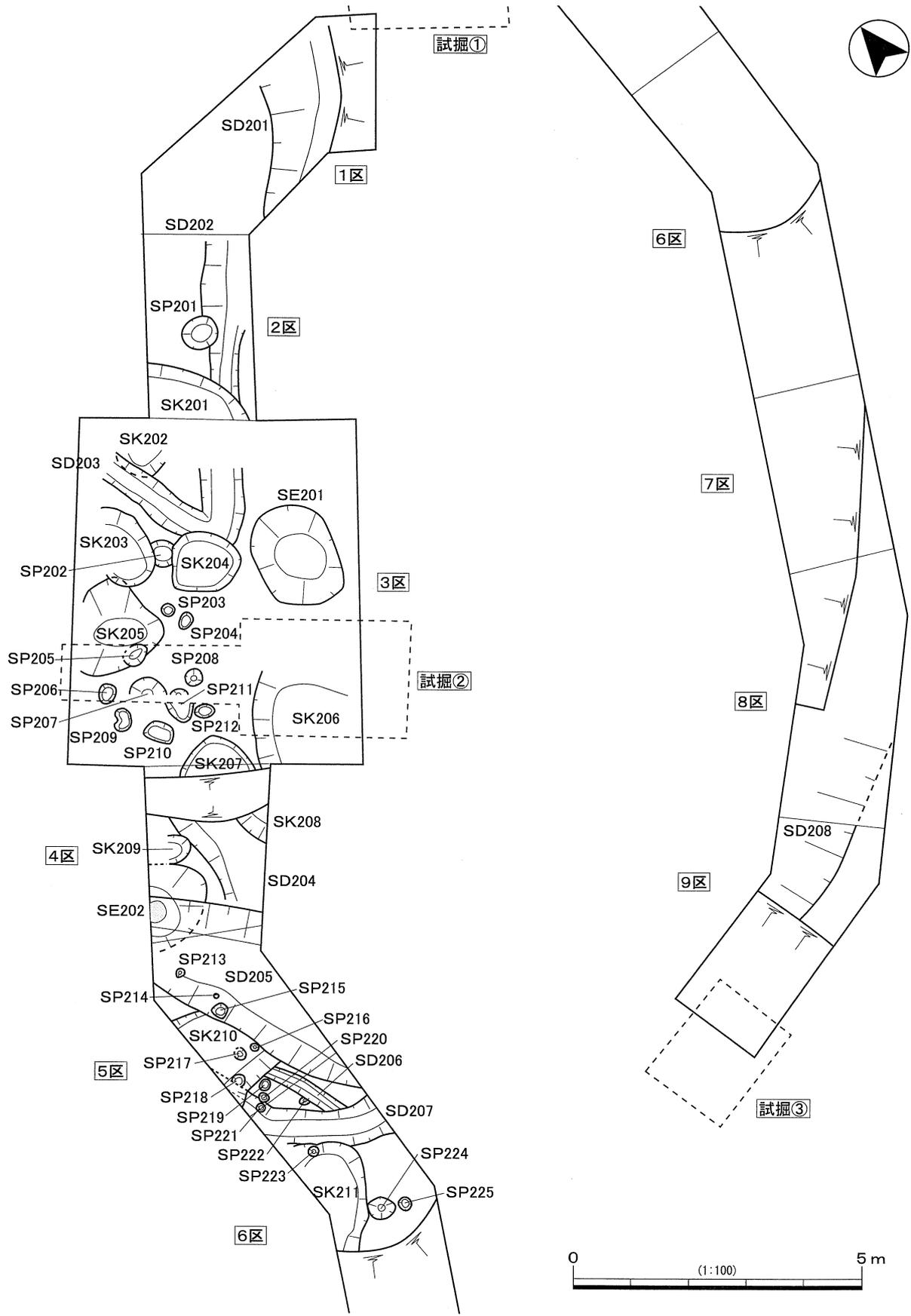
S E201

3区検出の井戸である。掘方平面形は南北にやや長い楕円形を呈し、規模は南北1.85m・東西1.4m・深さ約0.9mを測る。埋土は4層からなり、最下層が植物遺体を含む水成層、上の3層はブロック層で埋め戻し土である。遺物は土師器、瓦器、陶磁器が出土しており、底部からは完形品を含む瓦器碗・皿の他、木材・曲物の残片が出土している。本来は曲物井戸であったと考えられ、廃絶時には曲物を撤去した後に埋め戻したと考えられる。

遺物は1～14を図化した。1・2は瓦器皿で、1は底部に丸味があり、2は平底である。2は内面に圏線状～乱方向のヘラミガキを施す。3～10は瓦器碗である。器形的には深い8や浅い9が見られるが、見込みの暗文はすべて粗い平行線状で、6・10のみ体部外面に粗いヘラミガキを加える。5・10は完形である。11～13は中国製磁器で、11・12は白磁、13は青磁である。11は口



第4図 第1面平面図

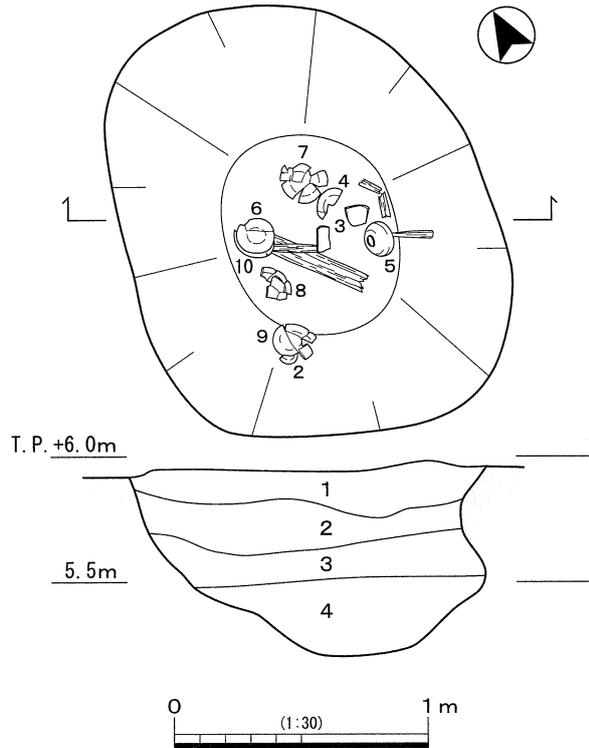


第5図 第2平面図

縁端部が外反し、12は玉縁状を成す。13は外面に櫛目文を施す。大宰府分類によると11は白磁碗Ⅷ類、12は白磁碗Ⅳ類、13は同安窯系青磁碗Ⅰ類に当たる。14は常滑焼と考えられる陶器甕である。調整は体部外面に縦方向の平行タタキを施す他、底部外面には制作時に敷いていた藁や粉の圧痕が残る。内面には全面に自然釉が掛かる。これらの出土遺物から井戸の廃絶時期は12世紀末頃に比定される。

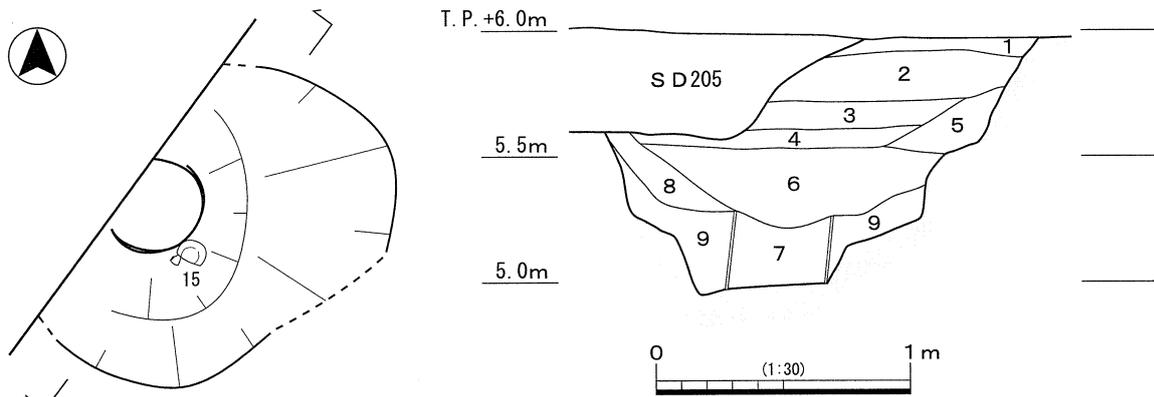
S E 202

4区検出の曲物井戸である。西部は調査区外に至り、また南部をS D 205に削平されているため詳細は不明であるが、掘方平面形は不整円形で、検出部分の規模は南北約1.5m・深さ約1.0mを測る。底部には最下段の曲物（直径約38cm・高さ約28.5cm）のみが遺存していた。埋土は9層からなり、1～6層がブロック状を呈する埋め戻し土、7層が曲物内埋土、8・9層は曲物設置時の掘方埋土である。遺物は土師器、瓦器、陶磁器の他、植物遺体（瓢箪）が出土しているが、図化したものは掘方内で曲物に近接して出土した瓦器碗（15）のみである。見込



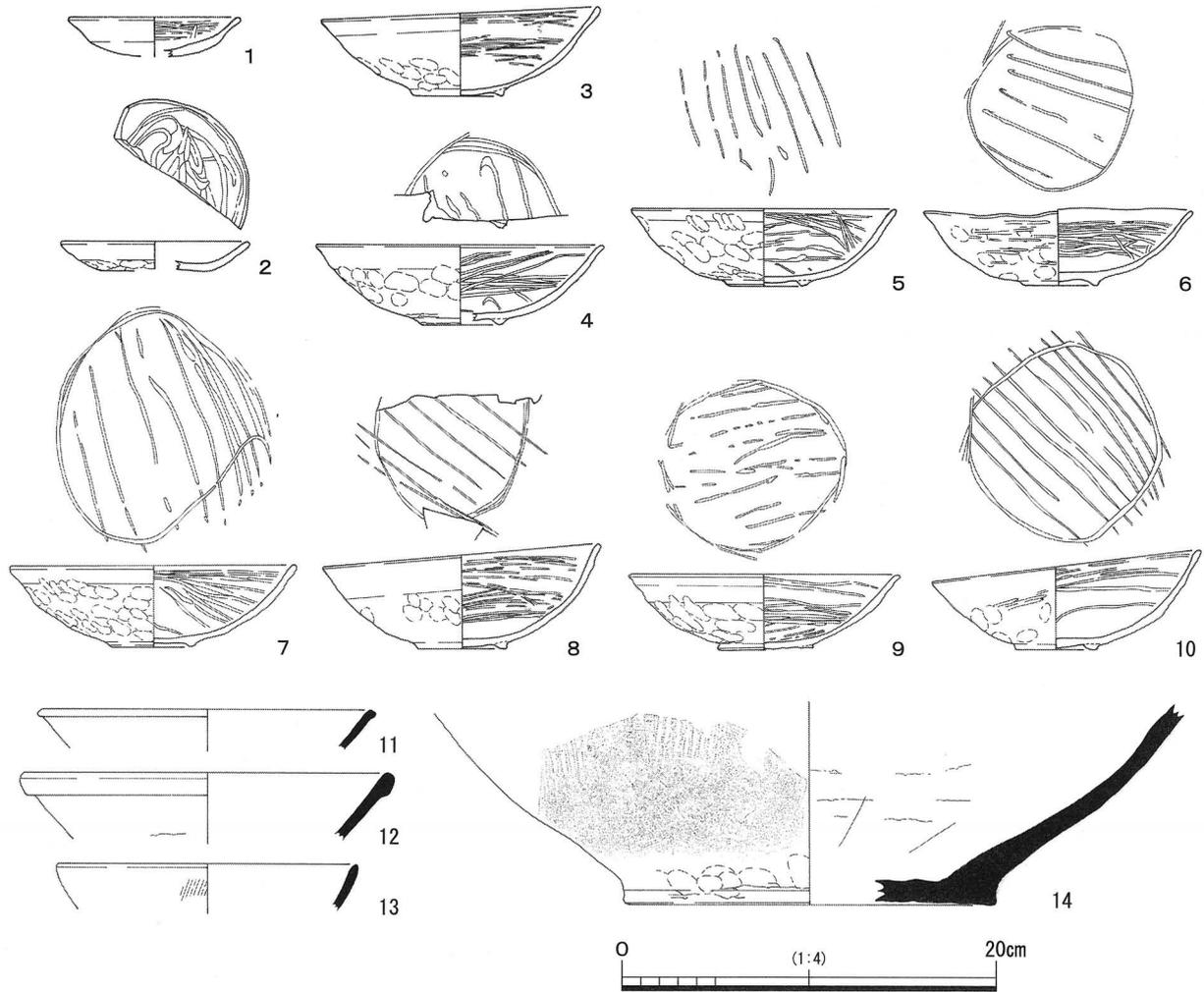
1. 10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト 炭 ブロック状
2. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂少混粘土質シルト 炭 焼土 ブロック状
3. 10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト 炭 ブロック状
4. 7. 5GY3/1暗緑灰色極細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト～シルト 植物遺体

第6図 S E 201平断面図



1. 2. 5Y5/2暗灰黄色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト Mn斑 ブロック状
2. 2. 5Y6/3にぶい黄色極細粒砂混粘土質シルト Mn斑 ブロック状
3. 10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂混シルト 炭 ブロック状
4. 2. 5Y6/4にぶい黄色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土 Mn斑 炭 ブロック状
5. 2. 5Y6/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土～シルト ブロック状
6. 5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂～中粒砂混粘土質シルト～シルト 炭 ブロック状
7. 5Y5/2灰オリーブ色シルトブロック混極細粒砂～細粒砂
8. 7. 5Y6/1灰色シルト質粘土ブロック混極細粒砂～中粒砂
9. 7. 5Y6/1灰色シルト質粘土～シルトブロック混極細粒砂～粗粒砂

第7図 S E 202平断面図

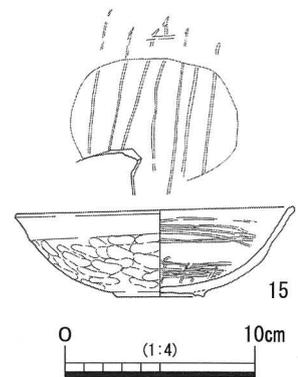


第8図 SE201出土遺物

みの暗文は粗い平行線状で、ヘラミガキは内面がやや密、外面には施していない。法量は口径14.8cm・器高4.6cm・高台径4.6cmを測る。時期は12世紀末頃に比定される。

S K 201

2区南部で弧状を成す掘方の一部を検出したもので、詳細は不明である。検出部分の規模は東西1.5m・南北1.0m・深さ35cmを測る。埋土は4層から成り、上から10YR4/1褐灰色細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト・2.5Y5/3黄褐色細粒砂混シルト質粘土・10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂～粗粒砂多混シルト・10YR6/3にぶい黄橙色シルト混極細粒砂～中粒砂である。上部には炭を含み、下部にはMn斑が見られる。遺物は12世紀後半に比定される土師器、須恵器、瓦器が出土しており、土師器皿(16)を図化した。色調は淡灰黄色で、口径9.4cmを測る。



第9図 SE201出土遺物

S K 202

3区北部で円弧状の掘方南部を検出したもので、南部はS D 203に削平されている。検出部分の規模は東西84cm・南北35cm・深さ26cmを測る。埋土は2.5Y6/2灰黄色シルトブロック混極細粒

砂～粗粒砂である。遺物は12世紀後半に比定される土師器、瓦器が出土している。

S K 203

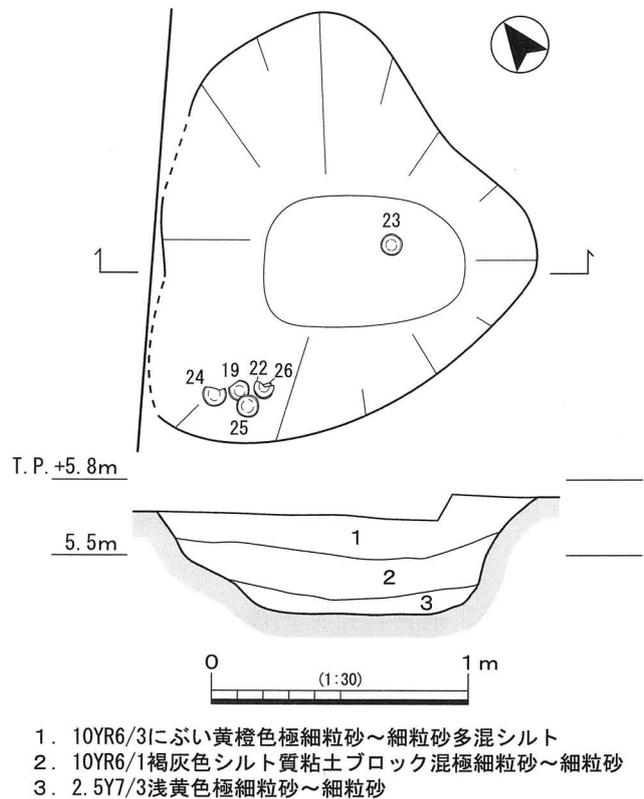
3区北部で検出したもので、掘方平面形は南北に長い楕円形を成す。検出部分の規模は東西90cm・南北148cm・深さ最大40cmを測る。断面碗形で、底部には起伏があり、埋土は上層が10YR5/2灰黄褐色細粒砂～中粒砂混シルト、下層が10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～中粒砂多混シルトで、共にMn斑を含む。遺物は12世紀後半に比定される土師器、須恵器、瓦器が出土しており、土師器皿(17・18)を図化した。17は底部が平坦で、口径8.5cmを測り、色調は淡褐色である。口縁端部の1箇所灯芯痕が見られ灯明皿である。18は口径8.6cmで、色調は褐色である。

S K 204

S E 201西側で検出したもので、掘方平面形は不整形円形を成す。検出部分の規模は東西120cm・南北105cm・深さ最大35cmを測る。断面逆台形で、埋土は上から10YR5/2灰黄褐色極細粒砂～中粒砂混シルト・10YR4/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混シルト・10YR4/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルトで、Mn斑を含む。遺物は土師器片が出土した。

S K 205

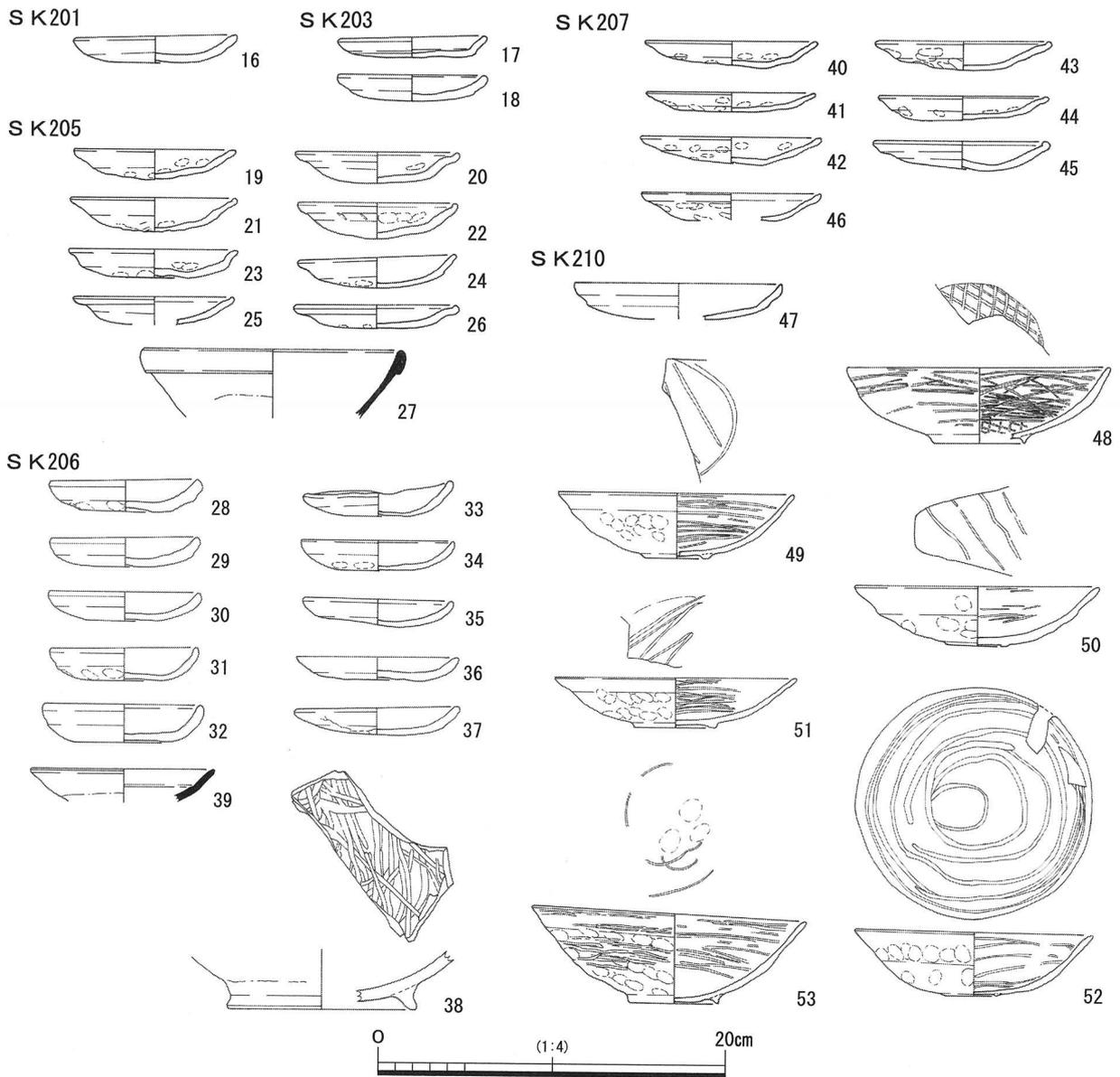
S K 203南側で検出したもので、北端はS K 203に切られている。掘方平面形は不定形で、規模は東西150cm・南北175cm・深さ最大48cmを測る。断面逆台形で、埋土は3層から成る。掘方南西斜面で土師器皿5枚がまとまって出土した他、底部中央でも1枚が正位で出土した。当土坑は規模等から勘案して井戸であった可能性が高い。遺物は土師器、瓦器、中国製磁器が出土しており、19～27を図化した。19～26は土師器皿で、このうち19～23がまとまって出土した5枚、24が底部出土である。23・24は口縁端部が外反し、他は退化した「ての字状口縁」皿で、小さく摘み上げるものである。22・24は完形。いずれも色調は淡灰黄色で、口径約9.5cmを測る。27は玉縁状口縁の中国製白磁碗で、白磁碗IV類にあたる。これらの遺物は12世紀前半に比定される。



第10図 S K 205平断面図

S K 206

3区南東部で掘方北西部の一部を検出したもので、試掘②調査時に大部分を掘削しており詳細は不明である。検出部分の規模は東西160cm・南北160cm・深さ50cmを測る。南壁では断面逆台形で、埋土は上から2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂混シルト質粘土・10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂多混粘土質シルト・10YR4/1褐灰色極細粒砂～中粒砂多混シルト質粘土～シルト・2.5Y6/1黄灰色シルト混極細粒砂～細粒砂で、全体に炭や焼土塊を含む。S K 205と同様、井戸であった



第11図 土坑出土遺物

可能性が高い。遺物は12世紀後半に比定される土師器、須恵器、瓦器、陶器（常滑？）、中国製磁器が出土しており、28～39を図化した。28～37は土師器皿で、28・33・36・37は完形である。28～35は口縁部が内湾するもので、このうち28～33は器壁が厚めである。36・37はこれらより口縁部が短いため器高が低い。37は口縁端部の1箇所に灯芯痕が見られ灯明皿である。口径・色調は28～35が約8.5cm・淡褐色、36・37が約9.5cm・淡灰黄色である。28～35が12世紀後半、36・37が12世紀前半の所産と考えられる。なお試掘②調査の際、南壁最上層中において土師器皿が集積する状況を確認しており、28～35はこの集積から出土したものである。38は瓦器鉢と考えられ、高台径11.0cmを測る。調整は内面に乱方向のヘラミガキを施す。39は同安窯系青磁皿Ⅰ類に当たり、12世紀後半に比定される。

SK207

3区南部で掘方北部を検出したもので、検出部分の平面形は方形の角部にあたる。検出部の規

模は東西130cm・南北70cm・深さ最大35cmを測る。断面皿形で、埋土は上層が10YR5/1褐灰色極細粒砂～粗粒砂混シルト、下層が2.5Y4/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルトである。遺物は12世紀前半に比定される土師器、瓦器が出土しており、土師器皿(40～46)を図化した。いずれも退化した「ての字状口縁」皿にあたり、口径は約10.0cmである。色調は41・46が淡灰黄色、他が淡褐色である。40・42・44は完形である。なお40～45は南壁内最下部で重なった状況で出土したものである。

S K 208

4区北東部で掘方の一部を検出したもので、詳細は不明である。深さ約28cmを測り、埋土は10YR5/1褐灰色細粒砂混シルト質粘土の単一層である。遺物は出土していない。S K 207に続く可能性がある。

S K 209

4区北西部で掘方東部を検出したもので、検出部の規模は東西50cm・南北50cm・深さ最大46cmを測る。断面逆台形で、埋土は上から10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト～シルト、10YR4/1褐灰色極細粒砂～細粒砂多混粘土質シルト、10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混シルトで、全体にブロック状を呈し炭を多く含む。遺物は12世紀後半に比定される土師器、須恵器、瓦器、陶器(常滑?)が出土しているが、図化しえるものはなかった。

S K 210

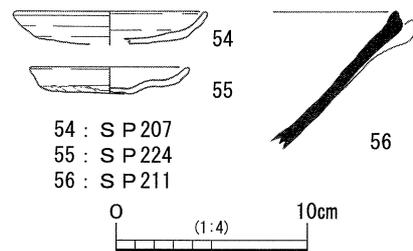
5区で検出した土坑で、西は調査区外に至り、東部はS D 205に削平されているため詳細は不明である。検出部の規模は南北1.7m・東西1.0m・深さ最大25cmを測る。埋土は上層が10YR5/1褐灰色極細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土、下層が2.5Y4/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土で、全体にブロック状で炭を多く含む。遺物は12世紀後半～13世紀前半に比定される土師器、須恵器、瓦器が出土しており、47～53を図化した。47は土師器皿で、口径12.0cmを測り中皿にあたる。48～53は瓦器碗である。器形的には深い53や浅い51が見られる他、48・53以外は高台が粘土紐状で、特に52は低く雑な成形である。48・53のみ体部外面に粗いヘラミガキを加え、見込みの暗文は48が斜格子、49・50が粗い平行線、51がジグザグ、52が螺旋で、53は連結輪状と思われる。

S K 211

6区で検出した土坑で、平面形は楕円形と思われる。検出部の規模は南北1.6m・南北1.1m・深さ最大35cmを測る。断面皿形で、埋土は上層が10YR5/2灰黄褐色極細粒砂～粗粒砂少混粘土質シルト、下層が10YR5/1褐灰色極細粒砂～粗粒砂混シルトで、全体にブロック状で下層に炭を多く含む。遺物は12世紀後半～13世紀初頭に比定される土師器、須恵器、瓦器が出土しているが、図化しえるものはなかった。

ピット

3区、及び5～6区で検出した。掘立柱建物を構成する柱穴と考えられ、S P 215・219・223が約1.5m間隔ではほぼ南北方向に並ぶ。他に規則性は見出せなかった。平面形は円形を基調とし、直径8～65cm、深さは最大45cmを測る。埋土はS P 224に柱痕が見られる以外はブロック状の単一層である。柱根の遺存するものは無かった。S P 224の柱痕部からは完形の土師器皿1点(55)が正位で出土している。各ピットの



54 : S P 207
55 : S P 224
56 : S P 211

第12図 ピット出土遺物

法量・出土遺物は表2にまとめた。

表2 表2面ピット一覧表

出土遺物のうち54～56を図化した。54・55は土師器皿で、色調は54が赤褐色、55が淡褐色である。56は東播系須恵器鉢で、片口を有する。12世紀後半に比定される。

溝

3区SD203は鋭角に屈曲する溝で、SD202に連続する可能性がある。SD208は8・9区で南肩を検出した。北肩は6～8区の大規模な攪乱により削平されていると考えられることから、5m程度の幅が復元でき、大規模な溝となる。深さは最大0.9mを測る。埋土は下部が流水堆積、上部はブロック状である。12世紀後半の土器片が2箇所であって出土した。なお1区SD201が北肩となる可能性があり、また4～6区SD205は直交する状況で、比較的規模の大きな溝であり、有機

遺構名	地区	規模 (cm) () : 残存値		出土遺物
		長辺×短辺	深さ	
SP201	2区	60×55	8	
SP202	3区	46×(40)	34	
SP203	3区	23×22	30	瓦器碗、須恵器
SP204	3区	30×22	23	土師器皿、瓦器碗
SP205	3区	45×35	45	土師器皿
SP206	3区	35×28	20	土師器皿、瓦器碗、陶器
SP207	3区	65×(30)	34	土師器皿・羽釜、瓦器碗
SP208	3区	30×30	14	
SP209	3区	40×30	24	土師器、土師器皿、瓦器碗
SP210	3区	50×35	20	土師器、土師器皿、瓦器碗
SP211	3区	60×45	43	土師器皿・羽釜、瓦器碗、須恵器鉢
SP212	3区	33×24	18	土師器、瓦器碗
SP213	5区	17×14	5	
SP214	5区	8×8	5	
SP215	5区	24×24	30	瓦器碗
SP216	5区	15×13	8	
SP217	5区	20×(17)	24	瓦器碗
SP218	5区	22×(20)	15	
SP219	5区	22×16	18	土師器、土師器皿、瓦器碗
SP220	5区	18×17	14	
SP221	5区	15×15	19	土師器皿、瓦器碗
SP222	6区	17×(11)	10	
SP223	6区	19×17	10	
SP224	6区	50×38	30	土師器、土師器皿、瓦器碗
SP225	6区	23×22	23	

的な関連が考えられる。SD208は調査区東側の現水路に平行・重複していることから、その前身の溝である可能性がある。この水路は南の佐堂遺跡で検出された11～15世紀の用水溝SD445の延長上に復元されており、これが現在も踏襲され機能しているとされている。この場合、SD208がSD445の延長上の溝であると考えられる。各溝の法量等は表3にまとめた。また出土遺物は57～115を図化した。

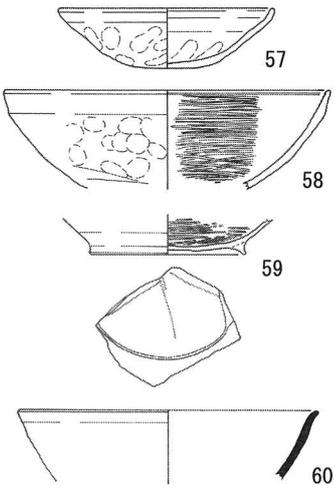
SD201-57は土師器碗で、底部～体部が丸味を持つ。色調は褐色である。11世紀初頭頃に比定される。58は大和型瓦器碗で、磨耗のため不明瞭であるが外面にはヘラミガキは施していないと思われる。12世紀代のものか。59は黒色土器A類碗である。底部外面にヘラ記号(×印?)を有する。10世紀代に比定される。60は白磁碗で、白磁碗V-1類にあたり、11世紀後半～12世紀前半に比定される。

表3 第2面溝法量表

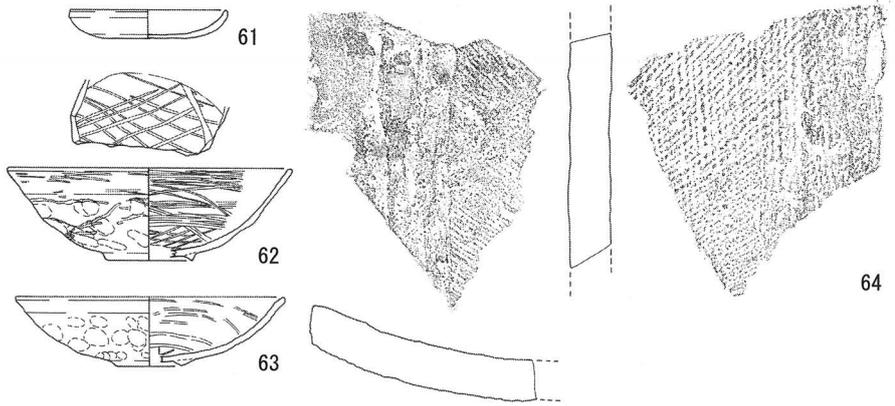
SD205-61は土師器皿で、口径8.2cm、色調は淡褐色である。62・63は瓦器碗である。62は見込み斜格子状暗文で、外面のヘラミガキは粗、63は見込みが粗い平行線状暗文で、高台は粘土紐状である。62が12世紀後半、63が13世紀前半に比定される。64は平瓦で、凸面に縄目タタキ、また両面に糸切りの際に生じたハケ状の条線が明瞭に見られる。

遺構名	地区	規模 (cm) () : 残存値	
		幅	深さ
SD201	1区	(100)	(50)
SD202	2区	50	15
SD203	3区	55～72	20
SD204	4区	(95)	15
SD205	4～6区	150	50
SD206	5～6区	27	15
SD207	5～6区	70	40
SD208	8～9区	(200)	(80)

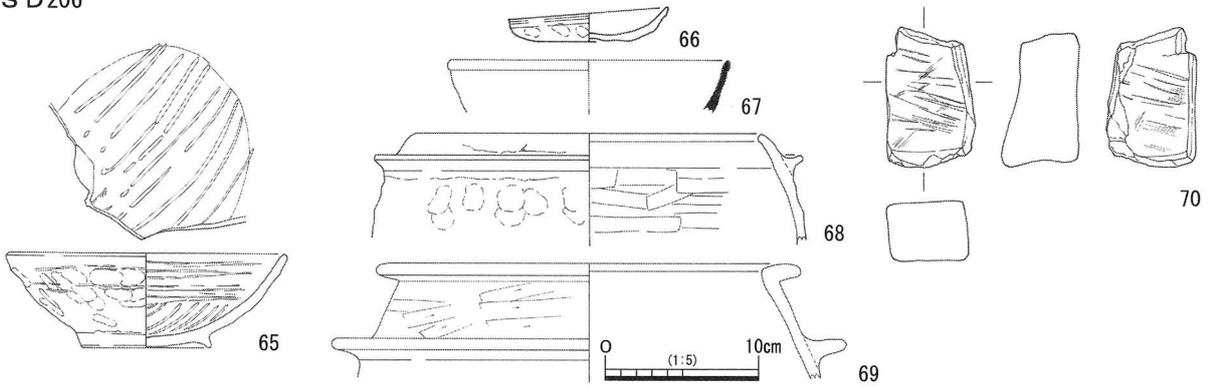
S D 201



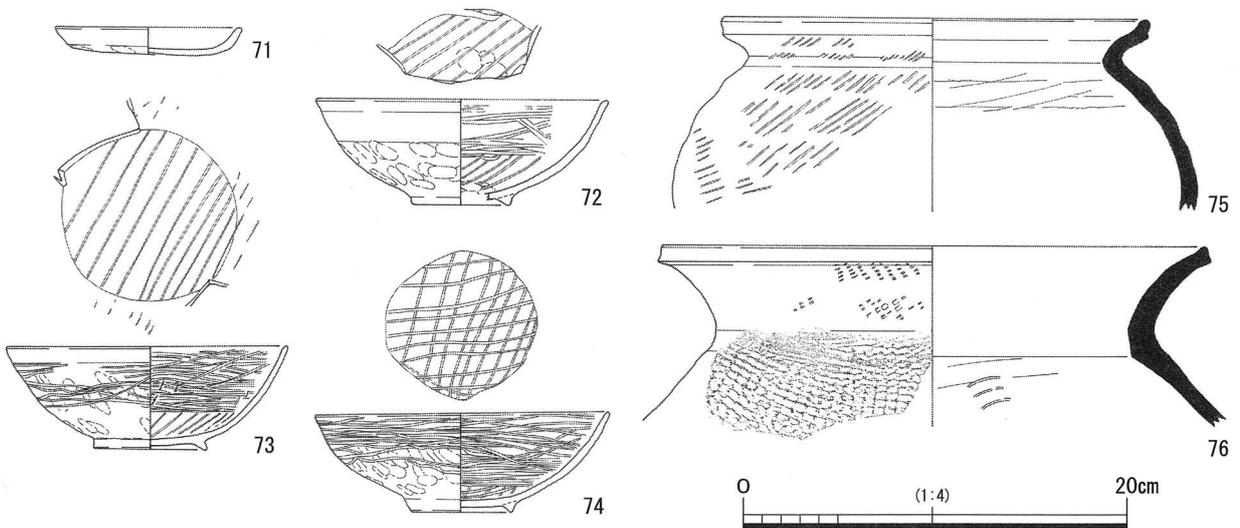
S D 205



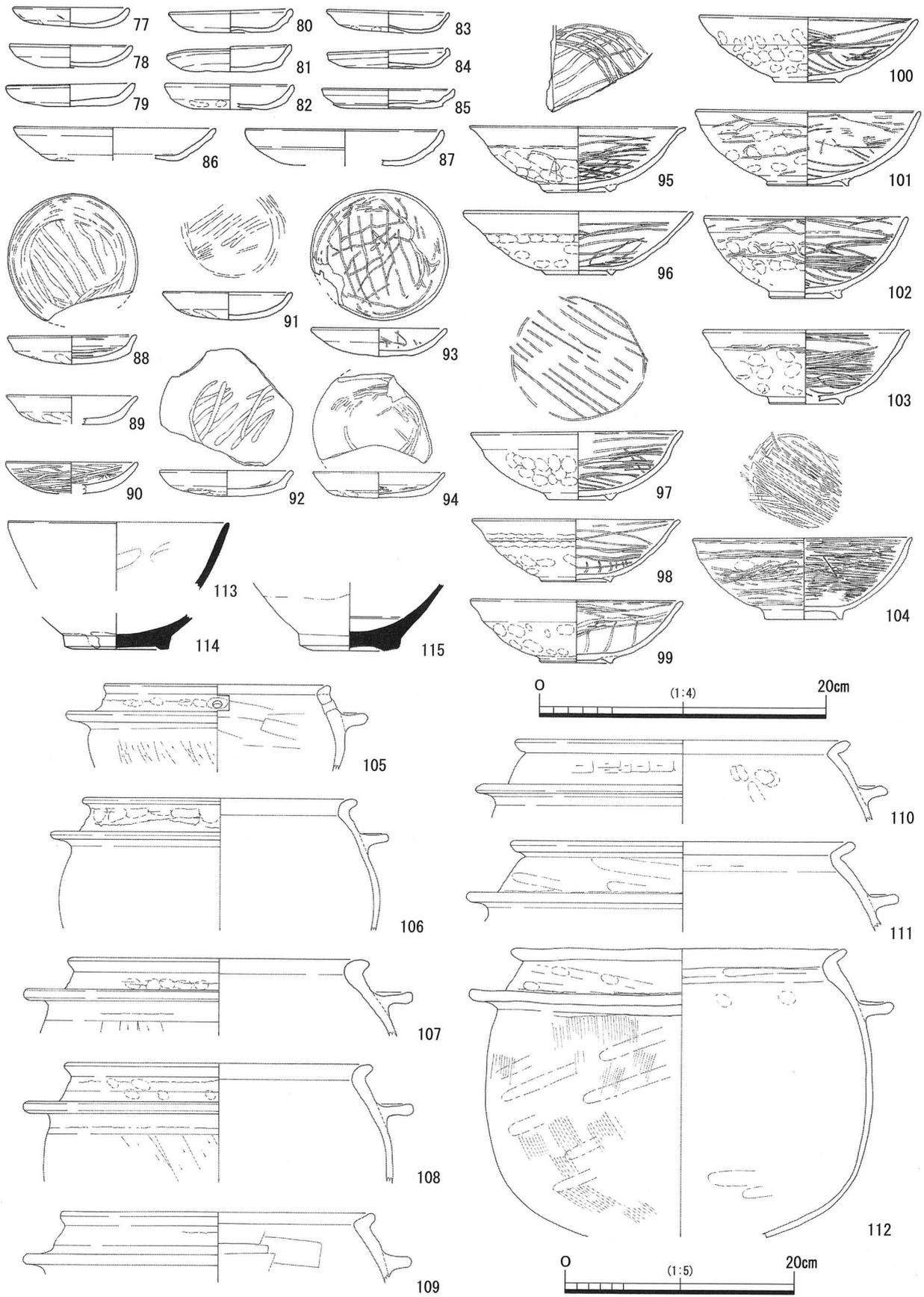
S D 206



S D 207



第13図 S D 201・205・206・207出土遺物



第14図 S D208出土遺物

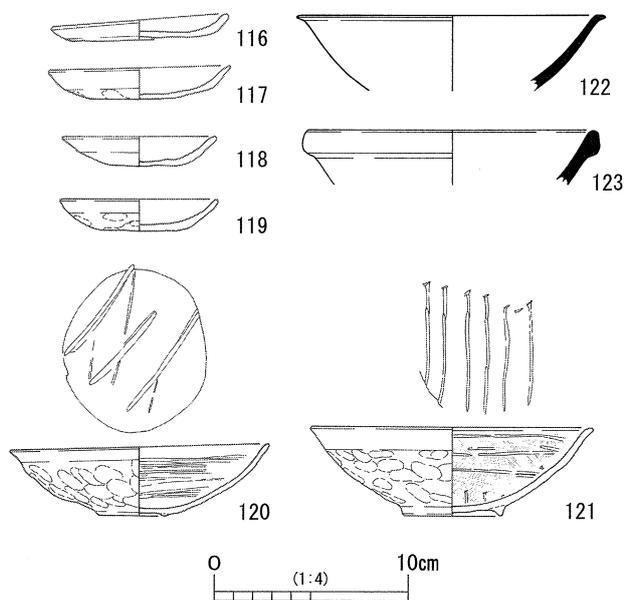
S D 206-65は瓦器椀で、器壁が厚く歪みが大きい個体である。見込み平行線状暗文で、外面のヘラミガキは粗である。12世紀後半に比定されるが、高台径は6.5cmを測り、同時期の通有のものに比して大きいといえる。66は土師器皿で、口径8.2cm、色調は淡褐色である。67は白磁碗で、白磁椀Ⅱ類にあたり、11世紀後半～12世紀前半に比定される。68は瓦器三足釜、69は土師器羽釜である。70は砥石で、両面に短軸方向の研磨痕が見られる。

S D 207-71は土師器皿で、口径9.5cm、色調は淡灰赤色である。72～74は瓦器椀である。見込みの暗文は72・73が平行線状、74は斜格子状で、73・74は外面にヘラミガキを加える。いずれも12世紀後半に比定される。75・76は須恵器甕である。75は受口状口縁を成し、外面調整は口縁部に及ぶ平行タタキ後ナデである。12世紀中葉の東播系須恵器と考えられ、神出古窯跡に類例が見られる。76は長く伸びる口縁部で、外面調整は口縁部に及ぶ格子タタキを施す。香川県十瓶山北麓窯に類例があり、11世紀末～12世紀中葉に位置付けられている。

S D 208-77～87は土師器皿で、色調はいずれも淡褐色である。77は口縁端部に灯芯痕が見られ灯明皿である。79はS K 206で見られた厚手の皿と同類である。85は平坦な底部から段を成して口縁部に至る形態である。86・87は口径約19.0cmを測り、大皿にあたる。88～94は瓦器皿である。見込みの暗文は88・91が平行線状、92が斜格子状、93が格子状、94が不定方向である。90は内外面密なヘラミガキで、89はヘラミガキを施さない。95～104は瓦器椀である。見込みの暗文は95・99・101が粗い平行線状、97・98・100・102・103が平行線状、104が密な平行線状、96が粗い斜格子状である。95・101～104は外面にヘラミガキを加える。104が12世紀前半、他は12世紀後半～13世紀初頭に比定される。105～112は土師器羽釜で、いずれもスス・コゲが見られる使用品である。法量的に口径約20cm(105)・約24cm(106)・約27cm(107～109)・約30cm(110～112)の4種類に分類が可能である。120は口縁端部が短く、また口縁部に穿孔を施している。105～112は12世紀後半に比定される。113は青磁碗で、内面に劃花文を施す龍泉窯系青磁椀Ⅰ-2a類にあたる。114・115は白磁碗底部で、白磁椀Ⅳ類にあたる。115は見込みに沈線が巡る。114～115は12世紀中葉に比定される

包含層(第2面)出土遺物

116・117は完形の土師器皿で、口径約9.4cm、色調は淡褐色である。2区出土。118・119は瓦器皿で、118は完形である。共に暗文は見られない。3区出土。120・121は瓦器椀である。見込みが粗い平行線状暗文で、外面にヘラミガキは施さない。121は内面にハケが見られる。共に12世紀末～13世紀初頭に比定される。7区出土。122・123は白磁碗である。122が白磁椀Ⅷ類で11世紀末～12世紀前半、123が白磁椀Ⅳ類で12世紀中葉に比定される。122が3区、123が8区出土。



第15図 包含層出土遺物

第3章 まとめ

今回の調査では第2面で12世紀後半を中心とする中世の集落遺構、第1面で中世～近世の生産関連遺構を検出した。出土遺物量はコンテナ12箱を数える。

当地は9層の河川（古長瀬川）が飛鳥時代頃に埋没した後に居住域となったようで、7・8層の土壌化層が形成されている。中世の集落遺構には掘立柱建物を構成すると考えられるピット群や井戸等があり、主に北部で検出された。東側調査地では井戸等が散発的に見られる程度であり、集落の中心は南の佐堂遺跡域に求められるが、さらに西へも広がることが確認されたといえる。

第2面検出の遺構群の時期については、出土遺物から12世紀前半～13世紀前半に位置付けられる。このうち、土師器碗（57）や黒色土器碗（59）を含むS D 201、また土師器皿において「ての字口縁皿」を主体とするS K 205・207が古相といえ、瓦器碗の様相からはS K 210が新相といえよう。S K 205～207では埋土中に土師器皿が集積する状況が、またS P 224でも柱痕内に土師器皿を埋置する状況が見られたが、遺構廃絶時の祭祀に伴うと捉えられる。

13世紀後半以降は全域が生産域となっており、生産関連遺構として第1面で耕作溝を検出した。

参考文献

- ・三宅正浩1985『佐堂（その1）』財団法人大阪文化財センター
- ・渡辺昌宏・他1985『美園』財団法人大阪文化財センター
- ・中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』
- ・荻野繁春1985「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会誌 第3号』福井考古学会
- ・森島康雄1990「中河内の羽釜」『中近世時の基礎研究VI』日本中世土器研究会

圖 版



調査地全景(北から)



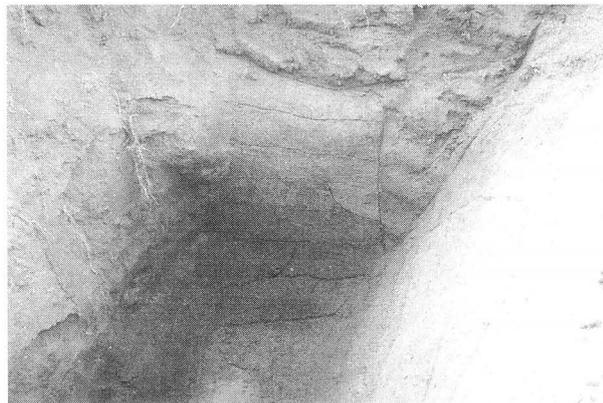
試掘①北壁



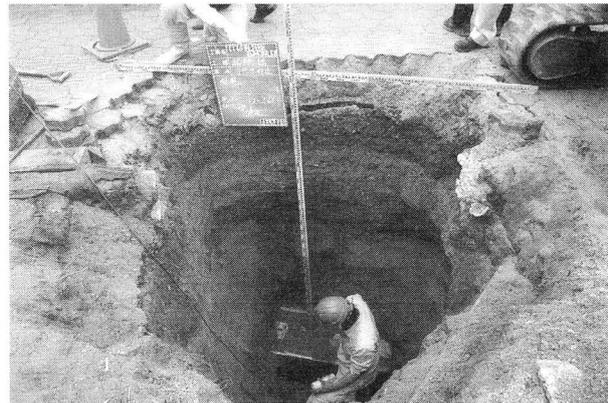
試掘②西半第2面(西から)



試掘②東半第1面(南から)



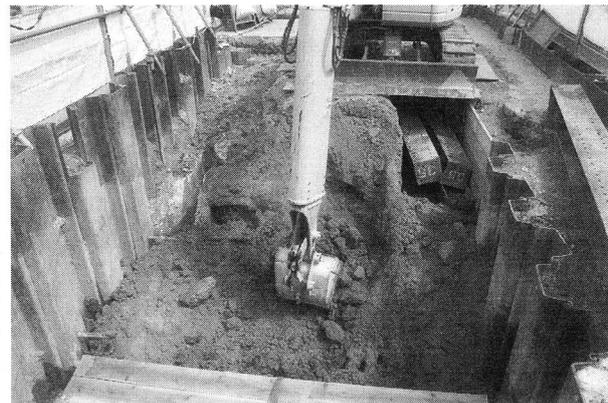
試掘②東半西壁



試掘③(南から)



試掘④北壁



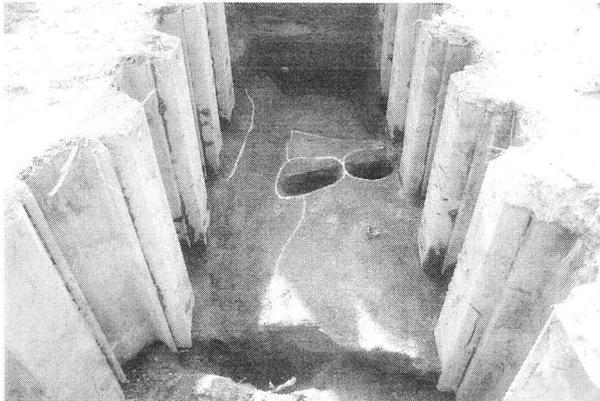
府道部掘削立会(南から)



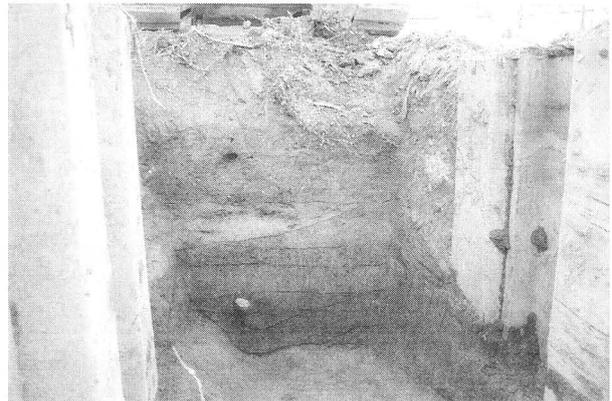
1区第2面(西から)



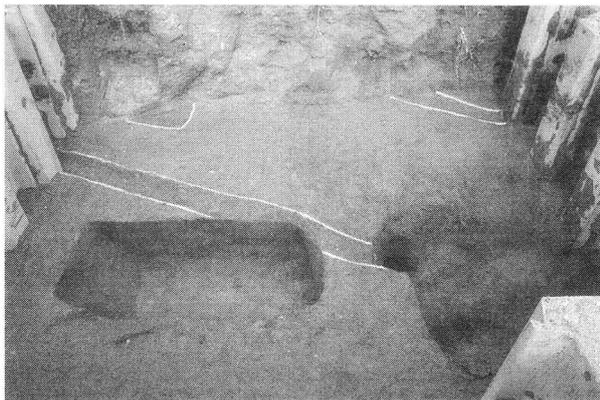
1区西壁



2区第2面(北から)



2区南壁



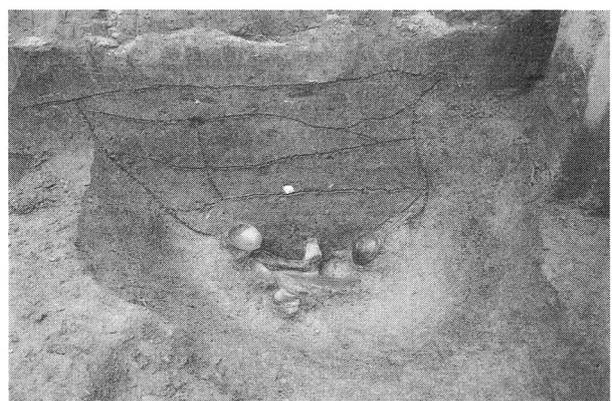
3区第1面南半(南から)



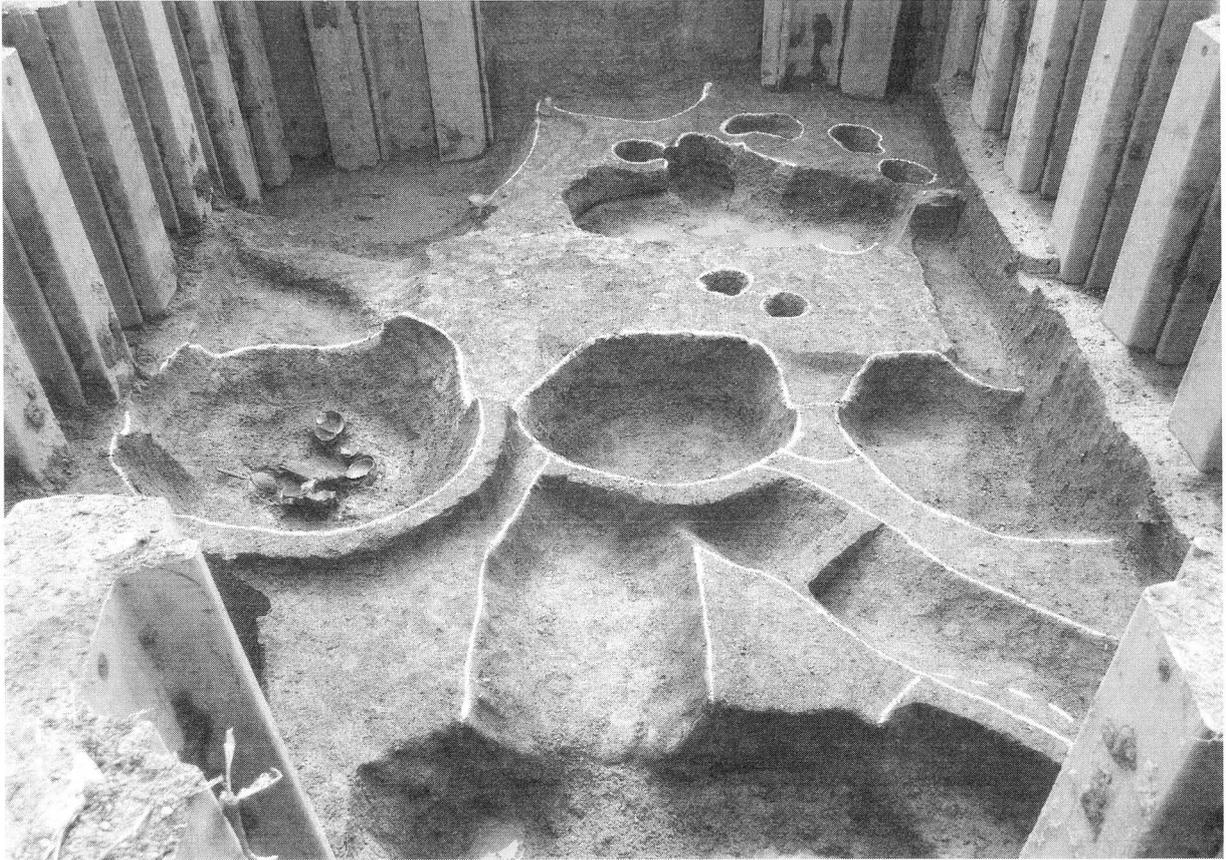
3区第1面北半(東から)



3区調査状況(南から)



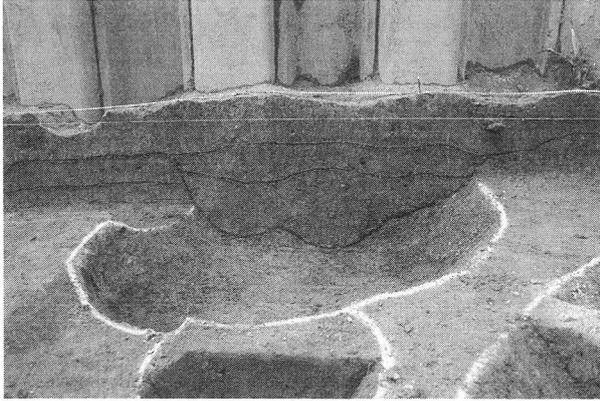
3区第2面SE201北壁



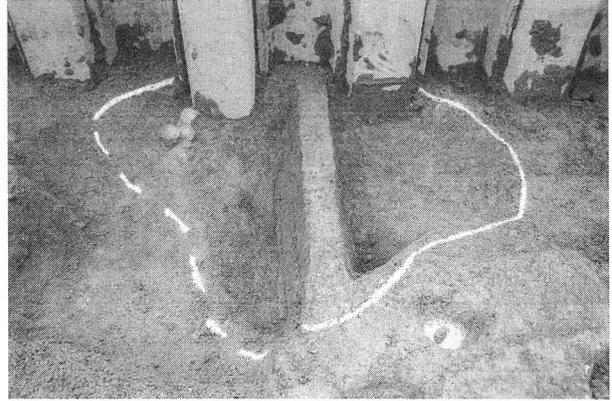
3区第2面(北から)



3区第2面SE201(上が西)



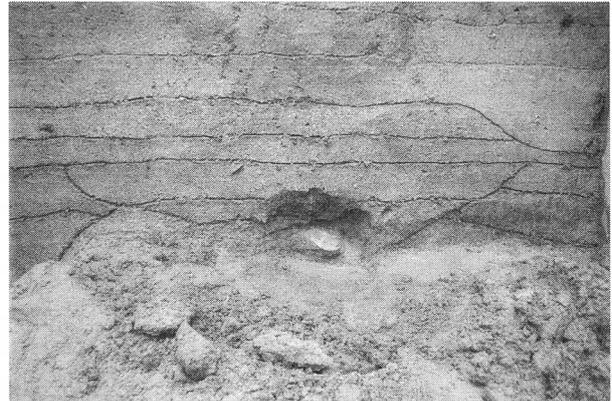
3区第2面SK203(東から)



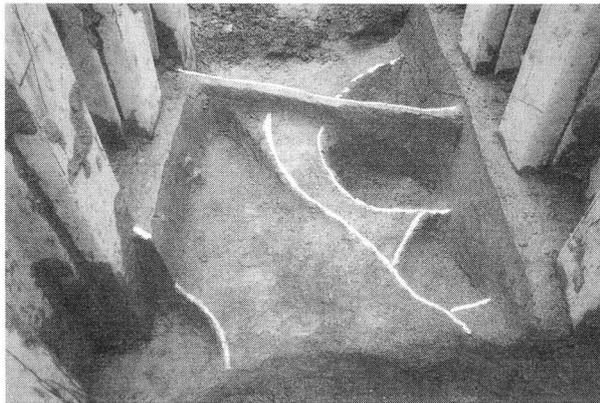
3区第2面SK205(東から)



3区第2面SK206上層南壁土師器皿集積



3区第2面SK207南壁



4区第2面(北から)



4区第2面SE202上部西壁



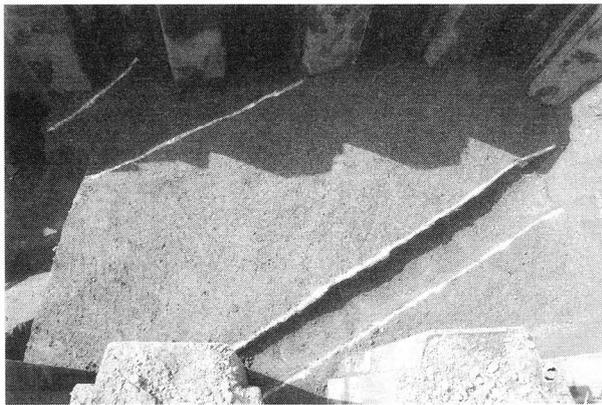
4区第2面SE202曲物検出(東から)



4区第2面SE202曲物(東から)



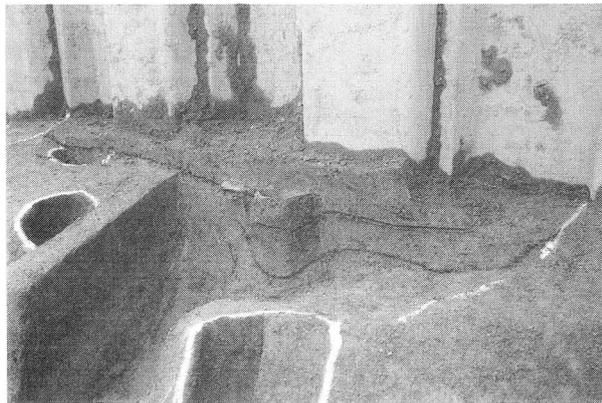
4区第2面SE202(東から)



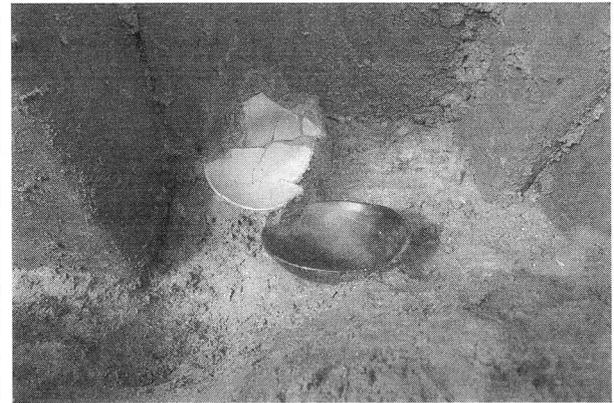
5区第1面(東から)



5区第2面SD205(南から)



5区第2面SK210(東から)



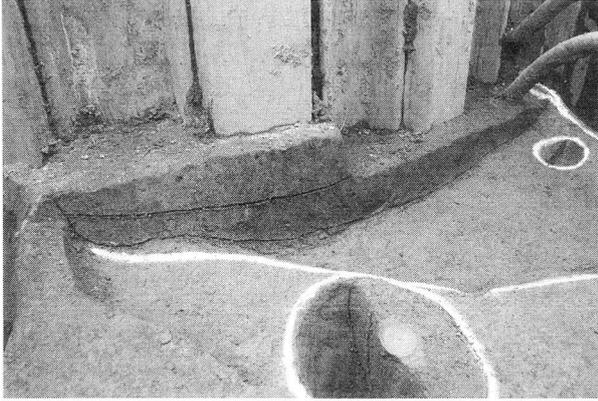
5区第2面SD207土器出土状況(東から)



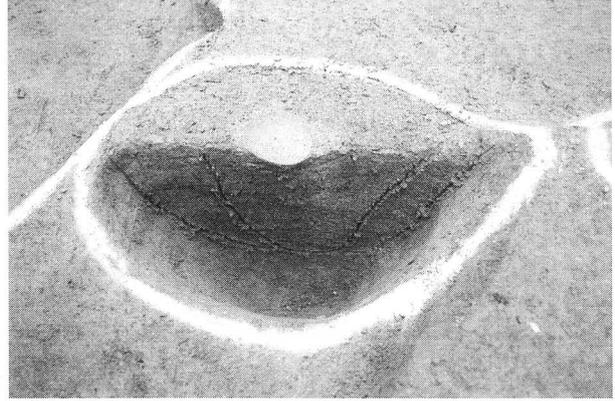
5区第2面(北から)



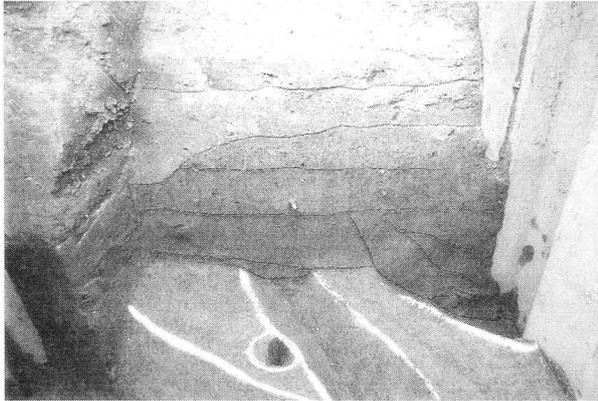
6区第2面(北から)



6区第2面SK211西壁



6区第2面SP224(南から)



6区北壁



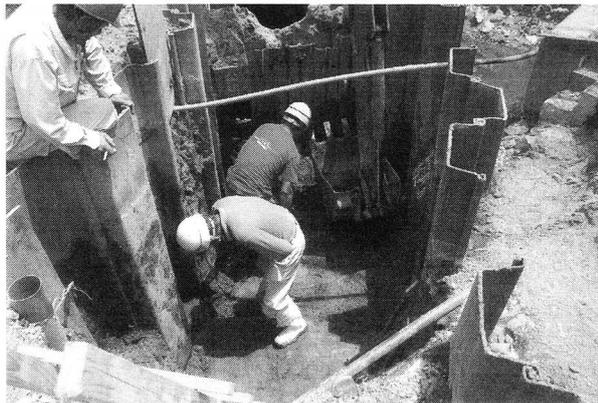
7区調査状況(北から)



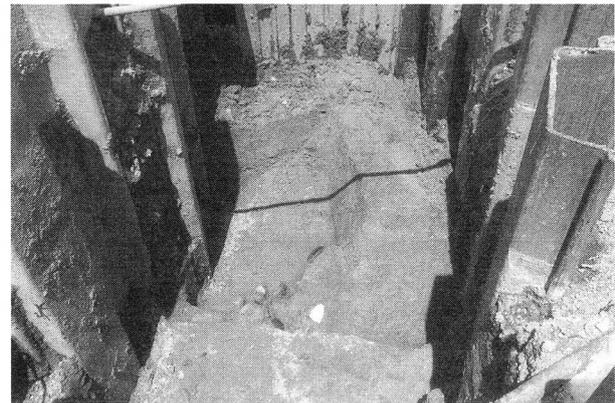
8区調査状況(西から)



8区第2面SD208遺物出土状況(西から)



9区調査状況(南から)

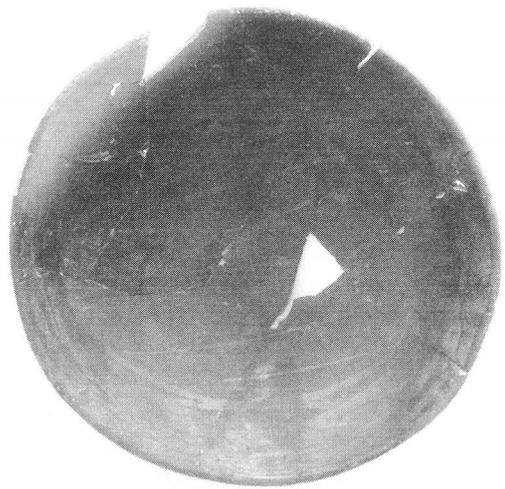


9区第2面(南から)

図版 8
出土遺物



5



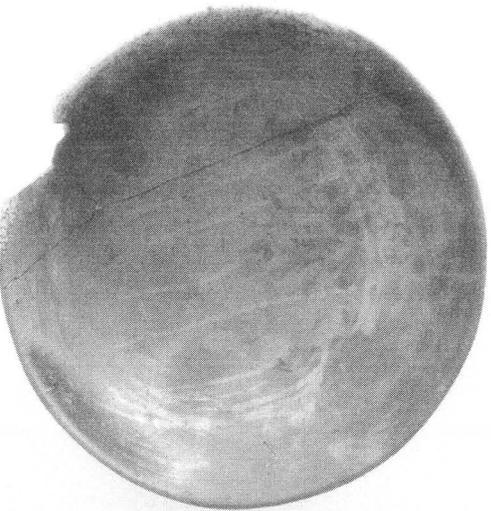
7



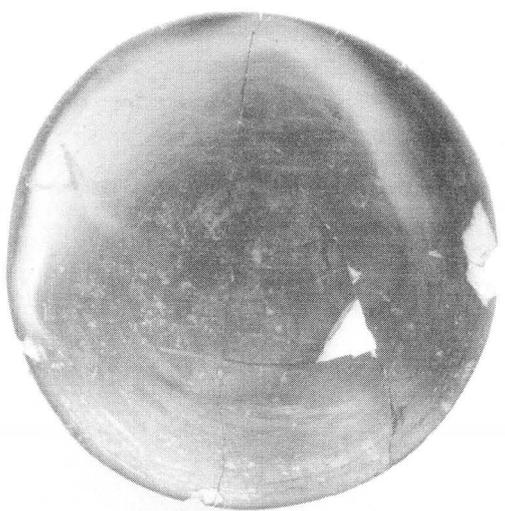
6



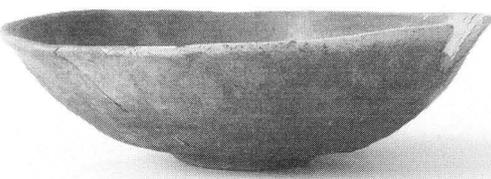
9



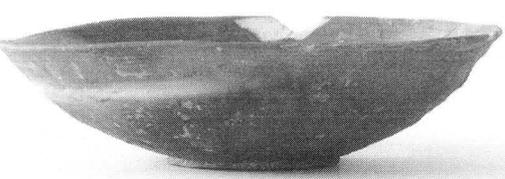
11



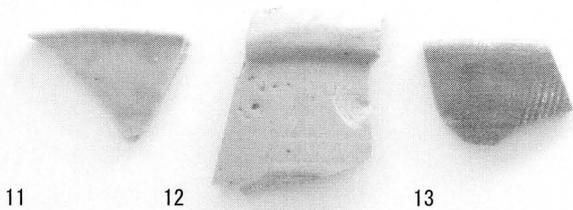
13



12



17



SE201、SK203

19 20 21 22
23 24 25 26



28 29 30 31
32 33 34
35 36 37

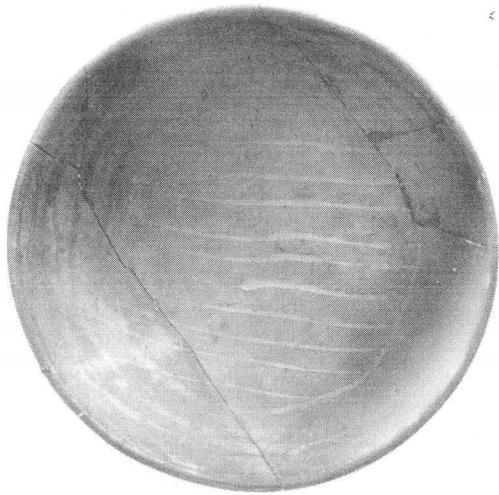


40 41 42
43 44 45

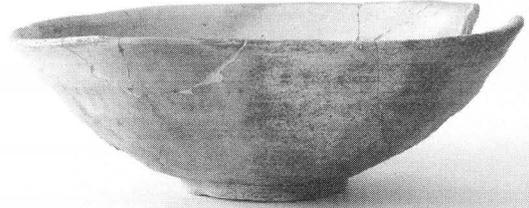


SK205、SK206、SK207

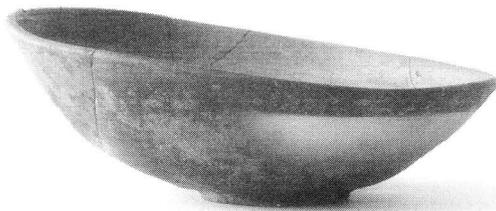
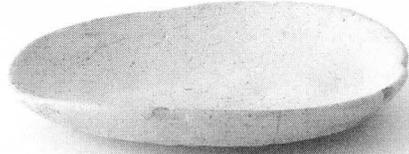
図版10
出土遺物



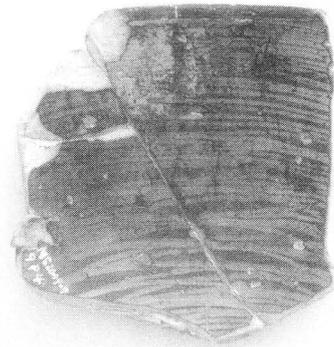
53



55



15

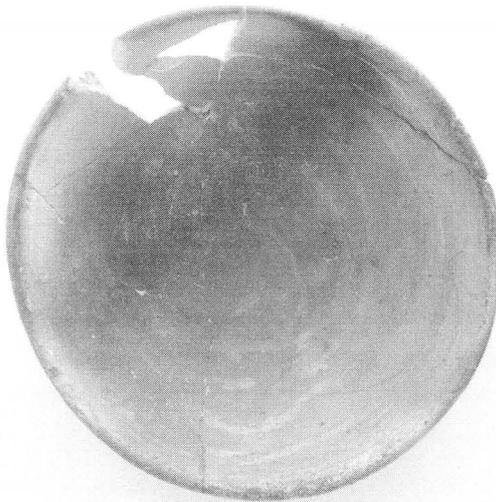
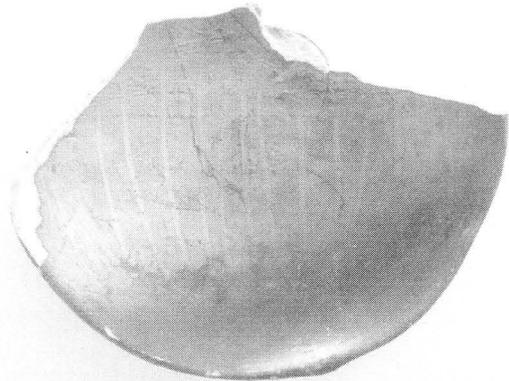


58



27

39

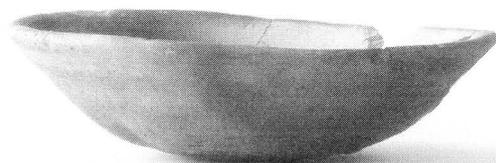


65



52

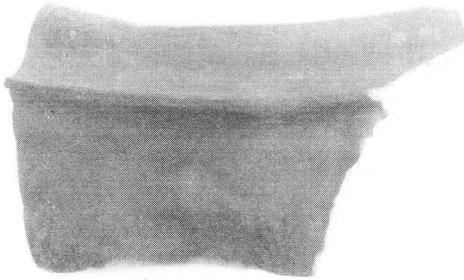
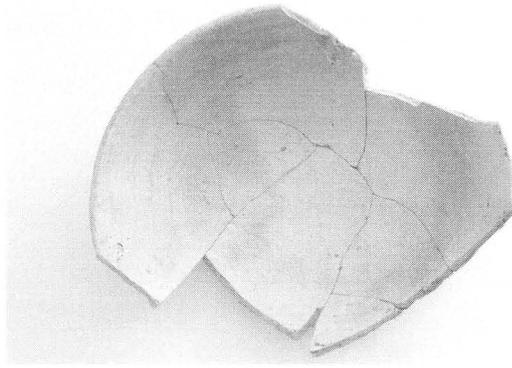
66



SE202、SK205、SK206、SP224、SD201、SD206



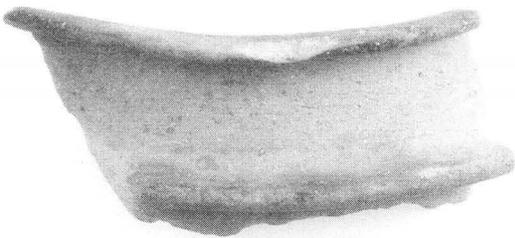
64



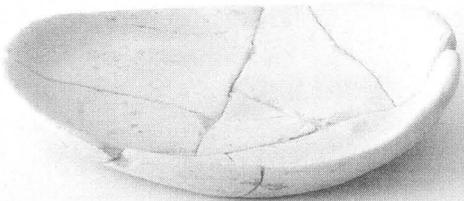
68



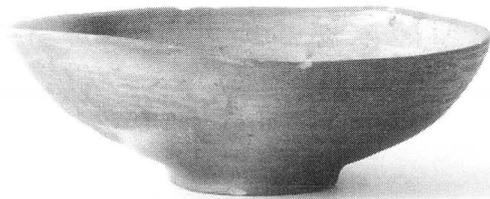
73



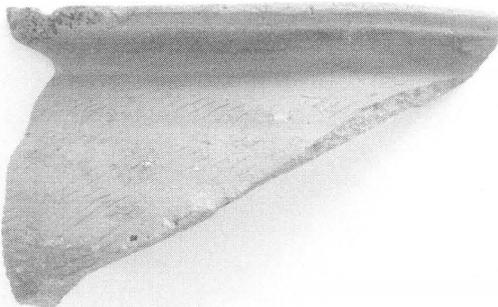
69



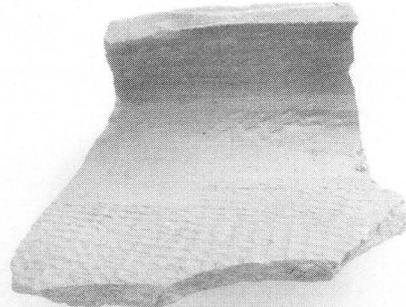
71



74



75



76

图版 12
出土遺物



77 80 83
78 81 84
79 82 85



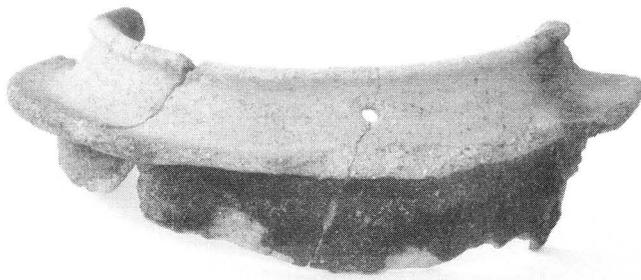
88 91 93
89 92 94
90



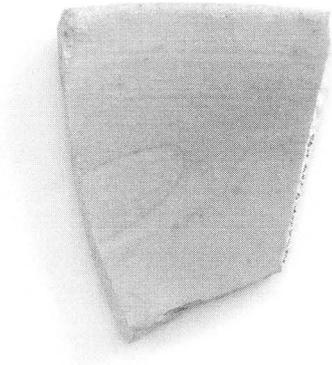
97
S D 208

100

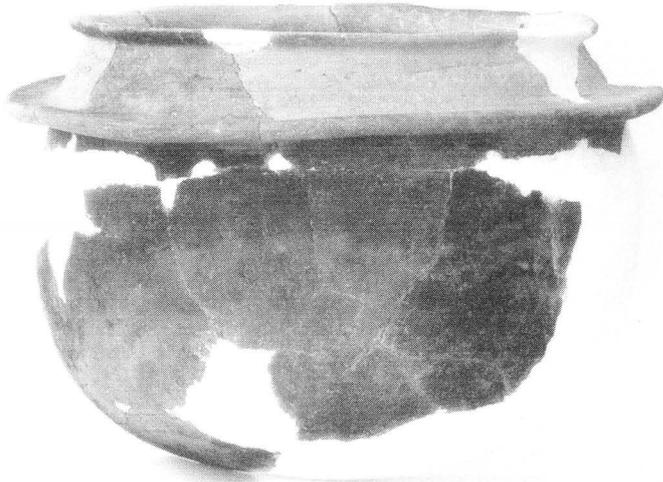
104



105



113



112



115



116



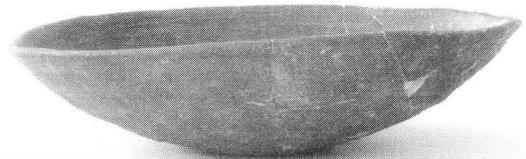
117



118



119



120

報告書抄録

ふりがな	1 きゅうほうじいせき(だい76じちょうさ) 2 みそのいせき(だい7じちょうさ)
書名	I 久宝寺遺跡(第76次調査) II 美園遺跡(第7次調査)
副書名	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	139
編著者名	坪田真一
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2012年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡 (第76次調査)	おおさかふやおしみなみきゅうほうじ3ちょうめ～ しおかわちよう3ちょうめ 大阪府八尾市南久宝寺3丁目 ～淡川町3丁目	27212	23	34度 37分 18秒	135度 35分 24秒	20100625 ～ 20101124	約113	記録保存調査
みそのいせき 美園遺跡 (第7次調査)	おおさかふやおしそのちよう 大阪府八尾市美園町	27212	34	34度 38分 16秒	135度 35分 29秒	20091119 ～ 20100705	約141	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
久宝寺遺跡 (第76次調査)	集落	古墳時代中期～後期	遺物包含層	土師器・須恵器	
		古墳時代後期～飛鳥時代	水田	土師器・須恵器	
		古代～中世	遺物包含層		
美園遺跡 (第7次調査)	集落	中世	曲物井戸・土坑・ ピット・溝	土師器・須恵器・瓦器・輸 入陶磁器	
		中世～近世	耕作溝		

要約	<p>久宝寺遺跡ではこれまでの周辺の調査で知られていなかった飛鳥時代の遺物包含層を確認した。作土である可能性が高く、一帯には古墳時代後期～飛鳥時代の生産域が広がるものと考えられる。西部では、既往の調査で確認されている古代～中世、古墳時代中期～後期の遺物包含層が良好に遺存しており、平面的には捉えられなかったが遺構と考えられる地層も見られた。</p> <p>美園遺跡の中世の集落遺構には掘立柱建物を構成すると考えられるピット群や井戸等があり、主に北部で検出された。東側調査地では井戸等が散発的に見られる程度であり、集落の中心は南の佐堂遺跡域に求められるが、さらに西へも広がることが確認されたといえる。土坑では埋土中に土師器皿が集積する状況が、またピットでも柱痕内に土師器皿を埋置する状況が見られたが、遺構廃絶時の祭祀に伴うと捉えられる。</p>
----	---

財団法人八尾市文化財調査研究会報告139

I 久宝寺遺跡 (第76次調査)

II 美園遺跡 (第7次調査)

発行 平成24年3月31日
編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地2
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 (株)近畿印刷センター
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 ニューエイジ <70Kg>
図版 マットアート <110Kg>

